Act 5. Last Stand

Act 5. Last Stand

24 WAR

聖域（サンクチュアリ）の心臓部（フリダヤ）にReal Virus.

Real Worldのなかでも、最も美しく、気高く、きよらかで、精神的な理想のワールド、物質主義的じゃない、Ideal Earth.　その真髄（しんずい）がウイルスに……！

RWがRV！

だじゃれかよ！

あたし、まぢショックだった。かるくめまい。

「あー、そんな……ありえねーよ……

ウイルスが……よりによって、アカデミアに……

それも、ウパニシャッド大聖堂の中枢に！

聖櫃（アーク）に、アークの上にあるなんて！」

あたしにとっては、真の叡智（えいち）の中枢、つーか、じぶんの真の奥の真がけがされたような、いままで考えたこともないショック、てゆうか、奥底がゆらぐ不安だった。

雨がジョリーの屋根をはげしくたたく。

もしかしたら、大聖堂の『ｋＯＯ』が盗まれないのって、そのせいかしら？　……でも、だれがアカデミアの中枢にウイルスをしかけられるの？　いや、データをいじれるようなやつなら、できるにちがいない。

やはり、ウイルスをしかけたやつと盗難のためにデータをいじったやつは、同じなんだ。そんなユーザー、たぶん、かぎられてる……

その日、あたし、おもいにとらわれ、ずぅっと独りぼっち、ぼんやりしていた。みんながせわしくひそやかにうごいていることにまったく気がつかなかった。

午後のお茶も無意識で飲んでいたし。

けど、ミントティーだったこととか、ちゃんとおぼえてる（笑）。

クッキーをかじりながら、考えこんでいた、とか…
最も神聖な場所にウイルスが入っている……。そうとわかれば、ＩＥの基本コンセプトが大きく変わってしまったのも、ふしぎじゃない。
考えてみれば、はじめからわかり切ったことだ。じゃなくちゃ、こんなにも、ＩＥが変わるはずがなかったのよ。
でも……でも、なんで。なんで、そんなことができたんだろう。
セキュリティって、いったい、どうなってたのよ。それとも、ＩＥって、じつは、ラグナレクのように、人知のおよばない風や海や雲や火山の噴火のようなものだったりして……あはは、人間（キャラ）じゃあるまいし、そんなバカな。
そのとき、扉がひらいた。あたし、はっ、じぶんに返る。いま、なにを考えていたのか、一瞬わからなくなった。雨にぬれたユリアスがキャビンに入って来て坐る。
表情がきびしい。いつものひょうひょうとしたふんいきはない。なぜだろう。
「そろそろ、ハン・グアリスに入ります」
「わかった」
ＡＮＫＡも口をかたくむすんでうなずく。
え？　いったい、なにが起こるの？
イースがしずかに剣の柄をにぎった。
「すでに周囲に集まっています」
ユリアスが不敵な笑いを泛かべながら、たのしそうにそういった。
とつぜん、外があかるくなり、爆裂音がなん発もとどろく。ものすごいさわぎが起こる。
夜襲？　奇襲攻撃？　ジョリーが止まる！
「さあ、ユリイカ、きみも外に出て」
イースにうながされる。
「え？」
こんなことはめずらしい。

あたしやエリコやミーシャは、安全のために留守番になることが多いからだ。

それに、ジョリーのなかには、『ｋＯＯ』がしまってある。だれもいなくなるなんて、いままでなかった。

どういうこと？

「みんな、あわてて飛び出し、聖典のことなんかわすれちゃっている、って設定なのよ」

ＡＮＫＡが微笑して、そういった。なに??

外に出ると、雨の音が耳を占領する。夜の闇に顔をたたく雨。風も強い。

「旗は降ろしたよ」

声でジャジュだとわかる。

あっというまに、びしょびしょ。それでも、あっちこっちで火が燃えている。

「うわぁ！」

炎に照らされた黒い装甲騎兵のすがたがたくさん見える。

「さあ、降りるのよ、ユリイカ」

え、なんで、なんで？

しかし、ぬかるんだ地面に降りたのは、ほんの一瞬だけ。ＡＮＫＡは、あたしに大きな黒い布をかぶせ、彼女も入ると、すぐに身をひるがえし、ひらりとすばやくデッキの上にもどる。な、なんなんだ？

驚いたことに、エリコ、イース、ミーシャ、ほかのみんなも同じうごきをしたみたいだ。音とうごきの感じでわかる。なんで？

デッキの片すみにかくれるように、小さくかたまった。

周囲では、激烈な闘い。鉄と鉄がはげしくぶつかる音。

あたしがたずねようとすると、ＡＮＫＡが指を唇にあてる。「しーっ」

そのときだ。だれかがデッキに上がって来た。あたし、布を少しめくってのぞく。暗くて、だれだかわからない。その人は、炎の光

をさけて、影になる場所をえらんでうごいていた。キャビンのドアをあけ、なかに入る。

「ＡＮＫＡ、たいへん、入っちゃったよ」

「わかってる。だまって！」

侵入者は、すぐに出て来た。腕に箱をかかえている。

『ｋＯＯ』の入った箱だ！

あたしがさけびそうになるのをＡＮＫＡが手でおさえる。

イースが黒布から出て声高にさけぶ、

「待てっ！」

男は、止まった。その瞬間、ちかくで火柱が上がって、男の顔を照らし出す。邪悪な眼つきで、顔がひきつり、別人のようだったけど、見まちがうはずもない。

グローだった。グロー・クロヴィス！　傭兵隊ガリア・コマータの隊長！

まさか、彼が裏切り者だったなんて！

乱闘のさなかにもかかわらず、黒い装甲兵たちには、こっちのようすがわかったらしい。騒乱（そうらん）に乗じて聖典を略奪（りゃくだつ）する作戦の失敗がわかり、１人、２人と逃げはじめた。

「深追（ふかお）いするな」

イースが大声でそういった。いわれるまでもなく、バロイ、ソンタグ、カノン、ボノ、チェバロたちは、追うつもりなどなかったようだ。敵が逃げはじめると、さっさと剣を鞘におさめて、さあ、飯でも食おうかって感じの顔になった。

さいしょから筋書きができていて、寸劇のようだ。

黒装甲兵を追い駈けたガリア・コマータも、すぐにもどって来た。

わずかにのこった炎が照らすクラウドの戦士たちすがたは、みんなぐしょぐしょだった。

ＡＮＫＡが、

「副隊長のストランド。おまえが今日からガリア・コマータの隊長だ」

ストランドとよばれた若者は、あぜんとした顔をした。ぬれた髪がひたいにはりついている。事態を理解できていない。

「しかし、ＡＮＫＡどの・・・」

けど、グローの表情はもっと深刻で、ドストエフスキーの小説の人物みたい（笑）に蒼白で、わなわなしていた。

傭兵隊長は、いきなりデッキから飛び降り、馬に乗って馬首をひるがえす。いまさら逃げる気？　しかし、イースが馬の尻に飛び乗り、グローの首をしめ上げた。

「ええい、ちくしょう、はなせ、はなしてくれ、・・・うぎゃーっ！」

ひきずり降ろされる。

ユリアスが大きな声で告げた、

「ここに、グローを処刑する。

いま、しょくんが見てのとおり、彼は、『ｋＯＯ』を盗んだ。

だが、それだけではない。

グローは、われわれの位置情報をシルヴィエに流した。密告者だ。裏切り者だ。

さらに、しょくん、難民虐殺に傭兵がつかわれたことをおもい出せ。

彼は、虐殺のために、各地の傭兵たちに連絡をとって、シルヴィエのために便宜をはかったのだ」

ストランドは、なっとくできない表情だ。

「しかし、そんなふうには見えなかった。

なるほど、聖典を盗むという大罪をおかしたのは、いま、この眼で見ましたが。

シルヴィエがわについたとは。どんな証拠があって、そのようにいわれるのか」

〆裂がそれにこたえ、

「へい、へいっ、証拠はあるさ。

まずは、グローの剣だ。

Nabu Kuduri Usur（ナブー・クドゥリ・ウツル）という銘がきざ

まれているだろ。バビロニア語だ。これをヘブライ語で、なんというかわかるか？」

ユリアスがゆっくり微笑し、こたえた、

「ネブカドネザル、だ」

おお、という声が上がる。〆裂がふたたびいう、

「しかし、とうぜんのこと、それだけでは、じゅうぶんではない、証拠としては。

さあ、グロー、おまえがいつも腰につけている革の袋をあけろ。そして、そのなかを見せろ」

なかから、金貨がなん十枚も出てきて、こぼれおちる。ユリアスが1枚をひろい、指でつまんでみんなに見せる。

「シルヴィエ金貨だ。

おもての面に浮彫になっている肖像は神聖皇帝のよこ顔だ。神聖文字で『聖神のごとく永遠の真実である神聖皇帝』としるされている」

そうだったんだ……あたし、ショックだった。

〆裂がさらに1歩まえに出て、

「これ以上、いうひつようはあるまい。罪は確定した。

さあ、グロー、最後に自らの罪を悔い、難民たちに謝罪しろ。

せめて人として死ね。それがおまえにとって最善であり、俺たちにできる最大の慈悲だ」

グローは、うなだれてひざをつき、頭をたれた。すすり泣きふるえながら、神にじぶんの罪を告げて謝罪し、難民たちの魂へゆるしをこい、最後にいった、

「俺も武士。せめて、名誉のために…自ら命を絶たせてください」

イースは、非情の声音で告げる、

「だめだ！　おまえは、斬首だ」

グローの口から悲痛な、なんともいえない苦しげなうめきがもれた。イースは、鞘からぬく。

「逝け！」

剣がふり下ろされ、首は地におち、亡骸が埋められた。
クラウドの旗はふたたびかかげられる。
ＡＮＫＡがみんなをうながした、
「さあ、出発しよう」
キャビンに、あたし、ＡＮＫＡ、イース、エリコ、ミーシャ、非錄斗、エチカ、ユユ、〆裂、ユリアス、チェバロ、ボノ、ミハイルアンジェロが集まる。
ジャジュ、迦楼羅は、バルコニー（馭者席）にいた。雷鳴の轟音が地をゆるがす。
ＡＮＫＡが説明をはじめた、
「内部告発サイトとか、マイクロブログなんか見てると、シルヴィエ軍はレオン・ドラゴとヴォゼヘルゴの国境にあるシビィレ山脈のどこかを越えてやって来るようね。
ただし、帝国のタンク（自走式装甲戦闘装軌車輛）隊や自走式連射ミサイル砲や装甲火砲隊や重装甲自動連射機関銃隊なんかの重機装甲部隊はとおまわりしてくるらしい。
険路や狭隘路はとおれないから、傾斜がゆるくて路のひろい迂廻路をつかうってことみたいね。
ゴルガストもシビィレ山脈の末端だし、そばに大きな街道があるから、ルートになる可能性はある。
あとでログを確認してみるよ。さいきん、シルヴィエ系のデータは見えにくくなっているんだけどね」
「やっぱ、シルヴィエはデータに干渉できるんだー」
あたしがそういうと、イースが、
「だとすれば、おそらくハッキングだろうね。技術があれば、だれでもできることだからね。
さあ、それはともかく、どの迂回路から来るにしろ、山脈のどこかをぬけるルートでしかないから、ひろいといったって、そんなにひろくて傾斜がゆるいわけではない。
重機装甲部隊はうごきにくいはずだ。攻撃するには、ちょうどい

い」

エチカがあごをさすりながら、

「食糧や物資を大量にはこぶ輜重隊も、けわしい山岳路を越えられまい。同じように迂回路で来るだろう」

「なるほど。ともかく、イースのいうとおりですね。平原まで来させてはまずい。ひろい場所では、重兵器がつかえてしまいますから。敵軍が着くまえに闘うべきです」

ユリアスがそういった。

ＡＮＫＡもうなずき、

「わかってるわ。重機装甲部隊とまともにやりあうつもりもないし。わたしたちが正面から戦えるのは、せいぜい歩兵部隊よ。重機装甲部隊に平原まで来られちゃ、ひとたまりもないわ。

ちなみに、歩兵部隊は山間の嶮路をつかって、さきに来るらしい」

チェバロが虎のように喉を鳴らし、

「なるほど。歩兵部隊がはやく到着するんだな。

さいしょのうちは、シルヴィエ帝国軍といったって、軽装備の歩兵しかいないってことか」

「そういうこと。むろん、軽装っていっても、帝国軍にしては、ってことだけどね。わたしたちと比較したら、じゅうぶん重装備よ」

ボノが髪をなでながら、

「その差は正義の勇気で越えられる。それはともかく、イースのいうとおり、山岳地帯で攻めよう。無為に友を喪いたくない」

ユユがきく、

「戦闘機は？」

ＡＮＫＡの表情がくもり、

「ユヴィンゴ王国の滑走路から、ここまで飛んで来るらしい。これには抵抗のしようがないわ。

もしかしたら、ヴォゼヘルゴにも、秘密の滑走路があるかもしれない。

ユヴィンゴにしろ、ヴォゼヘルゴにしろ、もともと飛行機のない

国だから、まっとうな空港なんてないはずだけど、シルヴィエがかんたんな発着スペースをつくっていないとはいい切れないわ。

超大国だからね」

「どうするの？」

あたし、きいた。

ＡＮＫＡは、

「これからは、箱モノに定住するのをやめよう。ねらわれやすいだけでしかない」

〆裂も賛成し、

「いいねぇ。クラウドは人だ。土地や建物じゃない。

ヴォゼヘルゴの滑走路のことも、調査しておいたほうがいいな。手があったらね」

ＡＮＫＡがうなずく、

「そうね。それから、もう１つ。

帝国軍はユーコニー川に舟艇数百隻を航行させるらしい。おもに物資の補給をするためにね。ユーコニーはエジンバール川やローマン川みたいに裂大陸間海洋につながれているから、つまり、彼らは、南から溯上してくることになる。ものすごくとおまわりよね。

そのせいで、重機装甲系の隊はついていかないらしい。ここも、たたきましょう。エリコ、あなたにお願いするわ。

物資輸送にくわしいあなたは、補給路を完膚なきまでに破壊できるでしょう」

イースがいった、

「では、迂回してやって来る重機装甲部隊を山間の狭隘地で奇襲するのは、ぼくがやろう」

「いいえ、あなたは、ダメ。〆裂にやってもらうわ」

「ねー、ＡＮＫＡ、あたしは？」

「あんたは、非錬斗といっしょにいて。主力部隊で、イースを手つだって。さあ、敵がどのルートで来るか調査しようよ。ユリイカ、ケータイ貸して」

ログを閲覧できるあたしたちは、情報の入手にかんしては、いまだに有利だ。もちろん、小さなうごきをキャッチするのは時間がかかるし（っていうか、場所とか、相手とかがあるていどわかっていないと、まず不可能）、たとえ大きなうごきであっても、ジンとか、シルヴィエとかのうごきをつかむことはむずかしくなってきている。けど、さすがに数万人以上のうごきはかくしきれないものらしい。しばらくしてから、情報がつかめた。ＡＮＫＡが強くうなずく。

作戦の基本ができた。どこで（場所・空間）、なん時ごろ（時刻・時間）から、どんな行動するか、だ。それによって、隊の編成が決まった！　戦争だぁＷＡＲ!!

☆

本部（ハン・グアリス平原　ジョリーのキャビン内）

全軍を指揮する

ＡＮＫＡ、ユリアス、ほか20名

☆

第1部隊（シビィレ山脈キャバリノ渓谷）

帝国軍歩兵部隊を谷の上から攻撃する

イース、迦楼羅、ユリイカ、非錄斗、ミーシャ、ユユ、バロイ、ソンタグ、カノン、チェバロ、ボノ、ＲＺＤ、ストランド&ガリア・コマータ、ほか1,200名

☆

第2部隊（ドルイド北壁附近）

帝国軍重機装甲部隊を北壁の上から攻撃する

〆裂、ジャジュ、タイラク、ノーロイ、ほか580名

☆

第3部隊（ユーコニー川附近）

帝国軍物資輸送船を攻撃する。

エリコ、エチカ、カブキ、ミハイルアンジェロ、ほか200名

☆

朝になった。雨はおとろえない。うす暗かった。

雨雲を凌ぐシビィレ山脈の偉容が見えはじめる。
山頂は雲の上にあって、見えない。
クラウドの紋章をつけた剣と楯とを持つ兵士たちは、馬を急がせ、たてがみをなびかせて怒涛のよう、蹄をひびかせ、すすむ。
正午になった。
ユーコニー川から10キロメートルの地点、ゴルガストの丘がとおく、雨にかすんで見えるあたりで手綱をひく。
そこはパライソレイユという、きよらかな泉のわく森で、あたしたちが集合地としていた場所だ。屯する。タープをはって、水を汲み、火を熾して昼食をつくり、仮眠をとった。しだいになかまが集まって来る。
夕刻、人数が集まると、それぞれ隊にわかれてミーティングをはじめた。それが終わると、肉を炙って食べる。したくをして就寝した。
午後7時、あたし、ＡＮＫＡといっしょにテントによこたわったけど、眠れなかった。明日は戦争なんだ……
「ＡＮＫＡ、寝てる？」
「ぅうん？
寝てたよ。どうした、眠れないの？」
「そうでもないけど……」
緊張がほぐれないのは、とうぜんだった。ネブカドネザル館を出発してから、すでにあたしたちのまわりで、帝国軍のスパイが7人もつかまっていた。あたしたちのうごきは、すでに読まれている可能性が高い。
まだまだ、うようよいるよ。〆裂は、つかまえるたびに、そういって笑った。
笑いごとじゃないよー。
雨の音がざーざー。テントの屋根をダダダダダーッ。連打している。眠れねーよ。
でも、明日は4時起き。はやく寝なくっちゃっ。

まあ、あたしなんか、まだいいほうだ。
ドルイド北壁へむかう第2部隊は深夜0時出発の予定だった。かなりとおいからだ。彼らは、48時間かけて北壁にむかう。帝国の重機装甲部隊が北壁に来るのは、その24時間後、って話だった。ようするに、3日後だ。
外では、いつでもだれかがうごいている。バタバタ。ドタドタ。ガサガサ。ドスンドスン。
あたし、寝返りをうつ。
エリコにメールでもしようかなー。どーせ、あいつの第3部隊は昼ごろ出発だし。
なんて考えているあいだに、眠ってしまった……
4時、非錄斗に起こされたときは、眠くて眠くて、眠れなかったのがウソみたいだ。
ふぁーあ〜。眠いよ〜。戦争なんかだるい。
まだ暗いが、外に出ると、もう集まっている。あわただしい、活気あふれた独特のふんいき。雨は弱く、霧のようになっていた。義勇の兵士の息がまっ白だ。
あたしは、熱いスープを飲む。
だれかがあたしの肩をたたいた。
ふりむく。
エリコだった。
「死ぬなよ、ユリイカ」
「あたりまえじゃん」
あたしは、すぐにスープに顔をもどした。
「ふふ」
笑いながら、それ以上なにもいわず、エリコ、去る。
「出発―っ！」
イースのかけ声で軍がうごき出す。
シビィレ山脈の入り口、ゴルガストのような低い丘が少しつづいたあと、いきなり絶壁がはじまり、いっきに高くなる。シイバの神

の住まう、シビィレの山々がその峰を天空につらねる場所。
その絶壁を切りこむように、せまくするどく深い、V字型の裂けめが山脈の奥へ奥へとつづいている。裂けめは奥で枝わかれし、いくつもの谷になっている。その1つがキャバリノだ。
あたしと非錄斗とミーシャとユユの4人は、1頭の麒麟に乗って、宙を駈けるように、けわしい道をかるがるとすすむ。イースと迦楼羅の麒麟があたしたちのさきにいる。
ほかの人たちの乗る龍馬もなかば飛ぶように駈ける。龍馬がない人たちは、徒歩だ。
キャバリノに着くと、峡谷の上のほう、高い場所に、小隊ごとにちらばった。
夜になる。小さなテントで仮眠をとった。風がはげしくて、テントが飛ばされそうだ。山頂にちかいからしかたない。
刃(やいば)のように凍った冷たい風。雨や雪すらもない。
朝になったが、風はあいかわらずきびしい。火なんか熾(おこ)せない。冷たい干し肉を食べる。
待った。
あたしは、いらだって歩きまわる。RZDがしゃがんで革巻きのスキッドボトルをくわえ、バーボンを飲んでいた。
「あんた、きらくね。
いつものことだけど、ほんと、部外者みたい」
表情のない、暗鬱な、魂のぬけたような、それでいて滾(たぎ)りのある瞳を、RZDは、あたしにむけた。
「だれでも部外者さ。リアルなんてありえない」
「べつにいーけど、なんでクラウドに参加したの？」
「それを受け容れるのが、クラウドだろ」
「でも、あんたにとって、なにがたのしいの？　クラウドに来てさ」
「俺は、永遠の敗北だ。
サンチャゴの帆みたいなもんさ。殻粉の袋でつぎはぎをした帆だ」
「なにいってんの？

あんた、ラテン系のともだちがいるの？」
「サンチャゴのことか？
ヘミングウェイの小説に出てくる人物だ」
「あれ、ヘミングウェイって、マーロウに出てくるはずかしいオジサンじゃなかったけ？」
「もしかしてレイモンド・チャンドラー（*Raymond Chandler*）の『長いお別れ（*The Long Goodbye*）』のことをいってるのか？」
「そうだったとおもう。
なんかおかしいの？」
「おかしいところしかない。
フィリップ・マーロウは、チャンドラーの小説の主人公のなまえだ。アーネスト・ヘミングウェイ（*Ernest Hemingway*）は、関係ない、実在していた作家だ。
物語のなかで、マーロウがある警官をジョークでヘミングウェイってよんでいただけだ」
「でさー、あんた、なんで参加したのよ」
「理由などない。永遠の敗北、勝利など儚い夢にすぎない。なにもねらっていない。理由などあるわけがない。
ＩＥにいる理由すらないのに、どうしてクラウドにいる理由があるものか」
「でもここに来たんだから、動機はあったんでしょー？」
「そうだな。あったぜ。
俺が反シルヴィエだからだ。
そして、おまえたちがぜったいに帝国に勝てないからだ。
敗北するために来たのさ」
「縁起わるいやつだなー。あんたがいると、勝つ闘いでも負けそーだわ。疫病神かよ！」
「青龍の言葉とはおもえない。青龍の位を持つ叡智の匠（マスター）。
執著を捨て切ったやつが聖の聖なる叡智の巨匠（きょしょう）だとおもっていたぜ。ふふ」

「あたしは、なんにも知らないよ。でも、青龍なんだよ。つーか、だから、青龍なのかもしれない」

「そうか、そうだな。つまり、敗北だ」

「たぶん、ちがうよ。

敗北だったら、あたし、少なくとも、なんのコトかわかるもん」

ＲＺＤがはじめて眼を瞠(みひら)いた。そして、「へっ」とへんな笑いかたで笑って、去った。

な、ナンなんだぉー*??*

あたし、非錄斗のところにもどった。麒麟のそばにいって、荷物の入った革嚢(かわぶくろ)からエリコのタブレット型ＰＣを借りて検索した。

たしかにチャンドラーの書いたハードボイルドに、主人公の探偵マーロウから「ヘミングウェイ」ってよばれる警官が出てくるけど、それって『長いお別れ（*The Long Goodbye*）』じゃなくて、『さらば愛しき女よ（*Farewell, my lovely*）』だった。あのなー*!!*

そして、ふたたび待つ。来ない。むなしく夜になった。

イースがいう、

「情報が入った。

山脈のむこうがわは大吹雪だったらしい。シルヴィエ歩兵部隊は進軍がおくれている。とおまわりしている重機装甲部隊のほうがぼくらの予測よりも、はやく進軍しているらしい。

歩兵部隊がこっちに着くのは、明日の昼ちかくか、午後のようだ。その数、およそ**22**万」

わかってはいたけど、具体的に数字をきくと、からだに緊張が走る。無意識に非錄斗の腕をつかんでいた。あたしの手の上に、彼の手がそっとかさなる。

「だいじょうぶだよ、ユリイカ。しんぱいない」

ぅーっ、う、うれしー。非錄斗、最高！　さ、がんばろー。

あたしたちは、身をふせ、風に吹かれて待った。

午後**2**時ちかく、歩兵隊の先遣隊が峡谷のとおくに見えはじめた。いよいよだ。

じわじわとちかづく。
帝国軍はあたしたちが待ちぶせしている場所から100メートルくらい下の隘路を通過するはずだ。それを上から、弓矢で攻撃する作戦だった。
蒼穹に風の音がすごい。けど、それが逆に、ぶきみなしずけさを醸し出していた。しずけさのせいで山の偉容がせまるみたいだ……
いやな予感がした。
となりで身をふせている非錄斗の顔を見る。
彼もなにかを感じていたらしい。あたしたちの眼があった。
こんどは、イースのほうを見る。彼女は、あたしたちのうしろを見ていた。あたしもふり返る。
1人の女が立っていた。あたしたちより高い位置だ。逆光でシルエットになっている。それでも、だれだかわかった。
ジン・メタルハート。
そのすがたを見ると、眼を燃やし、イースが剣をぬく。断崖をものともせず、飛ぶように駈け上がる！　ジンもその巨大な刃をぬいた。
ジンのうしろには、いまや3人となってしまった女戦士たちと、その配下の巨躯の戦士（いつのまにか復活して、10人にもどっていた！）。そして、レオン・ドラゴの精鋭部隊があらわれた。
まぢ!?　ＡＮＫＡがログから確認してくれたはずだけど？　やっぱ少人数はとらえきれないんだー。
黒い蟲のようにつぎつぎとわいてくるその数、およそ300。
これって、はさみ撃ちじゃん！　やばいよ。上にジン、下にシルヴィエ帝国軍。あたしたちの作戦は読まれていたの？
だけど、イースは、なにも意に介さない。彼女は、いつもふっ切っていて、なにも惜しまない。怖れも、まよいもなく、きよく只管に、まっしぐらに、ジンにむかって突っこんでいく！
「ふっ。上等だ！」
メタルハートは、唇をゆがめて笑いながら、眸で怒りをあらわし、

眼を睜く。

漆塗りのように黒光りする刃。こまかい魔法文字が彫られ、それが黄金の炎みたいにかがやく。刀身がクリムゾンレッドに燃えている。3人の女戦士たちと10人の男たちがむらがるようにイースにむかう。

「卑怯千万！」

そうさけんで馳せ参じ、立ちふさがったのは、灰色の鬚のソンタグ。三叉戟を持つ。ゆく手をさえぎるレオン・ドラゴの兵士たちをなぎたおし、ジンの配下の獰猛な男闘士たちに対峙する。

「おお、ソンタグ、助太刀するぞ」

バロイ、カノンも登り上がって、つぎつぎと敵を屠る。巨漢の彼らがいくと、なみの敵兵士は、こどもみたいに見える。

さらにチェバロ、ボノ、迦楼羅、非錄斗が3人のアマゾネスと剣をまじえる。

イースとジンの対決となった。

「おのれーっ」

怒り狂おしく滾るジンの剣がどす黒い炎に変わる。イースの剣がうす碧い光をはなつ。刃と刃とがぶつかる。すさまじい音、音というよりは空気の激震だ。火花がちる。飛びちった火花は岩石の上におちても、青や赤や黒や黄金に燃えつづけた。

ジンの剣の軌跡は漆黒で、イースの軌跡はレインボーのようにかがやく。

クラウドの義勇の戦士たちが降りて来たレオン・ドラゴの兵と闘う。こっちは数で勝るけど、ジンの鍛えた精鋭部隊をかんたんにたおすことはできなかった。あたし、ムジョーをとなえようとして、こころを集中する……

バリユースがいきなりあたしのまえにあらわれた。黒いコート、黒い革靴、サングラス。場にあわない、いつものかっこうで風に吹かれて立っていた……こいつら、ほんとになんでもありだ。

リボルバーをあたしにむける。

「ムジョー」
やっぱり。
こんどは、ぜんぜんきかない。
うす笑いを浮かべている。その笑みが消えた。
「ユリイカ！　あぶない」
ユユがバリユースの背なかを斬ったのだ。
「うをっ」
うめきながらも、ひき鉄(がね)をひく。
「ぁひっ！」
弾があたしのそばをかすめる。ユユがさらにバリユースに斬りかかる。
「ユリイカ、はやく逃げて！」
あたし、その場を離れた。非錄斗が来てくれる。
「ごめん、きみのそばを離れてしまった」
「いいのよ、イースがあぶなかったんだもん。
それより見て！
下のシルヴィエ軍がいつのまにか来ていて、こっちに上がって来るわ」
「ほんとだ！　やばいよ。ちくしょう、どうしよー」
10人の男の戦士をたおしたソンタグ、カノン、バロイがこっちへ来て崖の下をのぞき、いう、
「おお、来たな。
まるでアリのむれのようだわ！
かたっぱしから屠(ほふ)ってやるさ！」
ミーシャがさけぶ、
「のんきなこといってるばあいじゃないよ、たいへんだよー」
バロイが革袋の葡萄酒を陶器のジョッキにそそいで、ぐぃっとあおりながら笑う、
「小さなことを気にするな。俺たちにまかせておけい。ゥワハハハハハッ！」

「ちっちゃくナイぉー」
口には出さないものの、義勇兵たちも、ぜんたい的に動揺している。レオン・ドラゴの兵たちがいきおいづく。「うらあああああっ、うちたおせーっ」
少ないはずの彼らが鋼鉄製の怒涛（どとう）に見える。
あたし、いった、
「おちついて。
このままじゃ、負ける。あたしにまかせて」
バリユースには通じなかったけど、ほかのものには通じるはずだ。
「ムジョー・・・」
神聖帝国の兵士たちがよじ登って来る崖の岩がみるみるうちに風化する。つかめばもろくくずれ、砂に変わる。
「さあ、これで彼らは、登っては来られないわ。
形勢逆転よ！」
あれ？　チェバロや迦楼羅やソンタグやバロイやカノンも、みんなちかくの岩にしがみついている。
「おいおい、こっちの岩はだいじょうぶなんだろーな？」
「なにいってんのよ、だいじょーぶよー、ばかにしないでくれる？
それより攻撃よ」
登って来た数千のシルヴィエ兵士が落下、兵士たちの上につぎつぎとおちて、隘路（あいろ）では大混乱。
ストランドがイヴィラ・ヴィシャスの首をとった。
「やったぞーっ。これでわれらガリア・コマータの汚名は晴らされた！」
カノンが大笑する。
「だれもおまえらを責めてなどおらんかった。しかし、気にしていたんだな。みごと清廉（せいれん）の武士（もののふ）だ」
しかし、ボノがエピタフィラの剣に腕を斬られ、たおれる。ユユがたすけに入るが、たちまち脚に刀傷を負う。ガリア・コマータらは、レオン・ドラゴの兵士らをかたっぱしから屠（ほふ）っていたが、4分の1の

兵力なのに、レオン・ドラゴの精鋭部隊は手ごわい。
ソンタグが三叉戟(さんさげき)をふるい、ボノとユユのたすけに入る。
チェバロと迦楼羅は、褐色黒髪で剛力のアンジェラに押されていた。
しかも、イースもまたジンの剛腕から、いくどもふり下ろされる重く巨大な剣を受けるだけで、せいいっぱいだ。
ああ。
そのあいだに、登攀(とうはん)をあきらめたシルヴィエ帝国軍があたしたちの下をどんどん通過して平原へむかっていく。
やばイ。
作戦はかんぜんに失敗。敵は、このままハン・グアリスになだれこんでしまう。
平原に出られてしまえば、あたしたちに勝ちめはない。
やばすぎるよ！
あ！　イースがたおされた。あ、あぶない。カノン、バロイがたすけに入る。ジンに対峙し、彼女の剣を受ける。
「うお、すさまじき女子(おなご)だ！」
バロイがよゆうを見せようとして、じょうだんっぽくそういった。けど、顔はやや青ざめぎみで、カノンも額の汗を髭からしたたりおとし、
「強すぎるわい」
そううめいた。
ジンのほうこそよゆうで、微笑すら泛かべている。
「力こそすべて、力なくしてなにができるか。力でなければ、現実をうごかせない。
現実でなければ、無意味。現実こそが世界のすべてだ」
すさまじい膂力(りょりょく)で巨体の２人をかるがるうち負かす。バロイもカノンもひざを突く。
少人数の敵にここまで押されるとは……
しかも、あたしらクラウドの戦士1200は、すでにはんぶんくらいに

なっていた。大敗だ‥‥
「ムジョー！」
しかし、ジンの剣は‥‥、くずれない！　こいつもかよ！　なんで、無敵のムジョーがきかないの？
なんで。
なんでなんだろう。
「ユリイカ、どうしたのっ、ぼうっとして！　あぶないよっ！」
非錄斗の声で意識がもどる。
「もう、こっちに来て」
あたしは、ムリヤリ麒麟の背の上に投げこまれた。
「ユユ、お願いだ。ミーシャも乗せて、麒麟で空へ」
「でも、非錄斗、ぼくは」
「いいんだ。きみもケガをしてるだろ」
あたし、さけぶ、
「いやよ、非錄斗、あたしは」
「いくんだ、ユリイカ。きみがいては、僕は、闘えない」
「非錄斗―っ！」
「さあ、ユリイカ、非錄斗の気持ちをわかってあげて！」
ユユがそういった。
あたしたちは、宙へ上がる。
シルヴィエ帝国軍が隘路（あいろ）を駈け足で通過していくのが見えた。
なん十万という人間がこんな足場のわるいところを、わずかな時間で通過し終えようとしている。
「イース、撤退しよう！」
あたしは、そうさけんだ。
「もう、7割か、8割くらいが通過し終えちゃってるよーっ」
そのときだ。
はばたく巨大なカラスの背に立ったバリユースがあたしたちのまえにあらわれる。
無表情でリボルバーをあたしにむける。

「うわーっ」

ユユがあわてて麒麟の手綱（たづな）をひっぱり、むきを変える。弾があたしの髪の毛の上をかすめた。「ひゃぁー」

大急ぎで逃げる。カラスは、麒麟に追いつけない。ハヤブサにするべきだったわね、バリユースさん！

逃げ去りながら、ユユは、弓でジンの背なかをねらった。

「ふんぐっ」

眼を怒らせてジンが背の矢をぬくとき、イースは、体勢をととのえた。ジンがむき直るのを待つ。

「ふ。あいかわらず、おろかな律儀（りちぎ）さだな」

「正義でなくては無意味だ。正義こそが真実だ。真実こそが生命のすべてだ。

生きることは、生きのこることではない。真の生命なくして生きたとはいえない。

おろかであわれなのは、きさまだ！」

ジンの剣にふたたび飛ばされ、たおれる。

けれど、ふたたび立ち上がる。

25　無限の未来（インフィニテ・フューチャー）

ＲＺＤがあたしたちにむかって大声でいう、

「帝国軍がハン・グアリスにむかったことを知らせるんだ」

暗鬱（あんうつ）で、ほとんど言葉を発しない彼がそんな声を出すことに驚いたが、そんなばあいじゃないね。

そうだよ！　ほんとーだ。このままじゃ、ＡＮＫＡがやばい。

歩兵部隊が平原にせまっているってことだけじゃない。予想に反してレオン・ドラゴ軍がまとまりをうしなっておらず、じゅうぶんに機能しているってことがこの山上の戦いでわかったからだ。

つまり、平原にのこっている少人数のクラウドの戦士は、シルヴィエとレオン・ドラゴにはさまれることになる！

「もしもし、ＡＮＫＡ、作戦は失敗よ。それにレオン・ドラゴ軍があらわれたわ。ジンが指揮をとってるのよっ！」

「わかった。こっちは、いまのところだいじょうぶだけど・・・けっこう、やばいね。気をつけるよ。いまのところそれしかない。

でも、いい知らせもあるのよ。〆裂が敵に壊滅的な打撃をあたえたわ。重機装甲部隊は決定的な損害をこうむって、進軍できない状態よ。

〆裂を、そっちへむかわせるわ」

そうなんだ。

すっげー。

さすが〆裂。

帝国の火砲附自走式装甲戦闘装軌車輌を、ティラミスみたいに２つ、４つに斬って、あっというまに、数百台を破壊してしまったらしい。しかも、重機装甲部隊の援護のために、ユヴィンゴから飛んで来た戦闘機の自動連射銃の襲撃に遭っても、敵の火砲附タンクや自走式連射ミサイル砲を奪って操作し、戦闘機数十機をたちまち撃ちおとしてしまったらしい。

すげー。すごすぎる。１人軍隊とよばれるものダテじゃない。まさに１騎当千だー。

なんて驚いているうちに、かがやく３首の白龍に乗った〆裂があらわれた。すでにボロボロだったイースと、闘気が火焔光のようなジンとのあいだに立ちはだかる。

「さあ、来てやったぜ。

俺の相手をするか、ジン・メタルハート」

「ウムム」

ジンがうなる。

〆裂が青眼に（正面中段に）かまえ、全身から清流のような闘気をはなった。それは、美しい青白い炎となって、太陽のコロナのように、〆裂のからだの３倍くらいの大きさに、蔦のような渦を巻いて燃え上がった。

「ふんぬっ！」
ジンが渾身の力をふるって〆裂にうちこむ。
「ふ」
〆裂は、ハエでもはらうように、かるくはらいのける。
「うらっ」
ジンが上段にかまえてふり下ろす。力でねじふせる気だ。〆裂は、かるく受けとめる。ジンがからだのバランスをくずす。
憤激したメタルハートが狂ったように息もつかせずうちこむ。〆裂は、よゆう。ジンがくやしさで蒼白になり、息を切らせ汗をしたたらせる。
「どうした、メタルハート。膂力（りょりょく）では俺を斬れぬぞ。
剣は精神だ」
歯がみするジン。しかし毅然と姿勢をただすと、ふりむき、
「撤退だ。
任務は果たした」
そして、〆裂へ向きなおり、
「まさか女を背から斬ることはあるまいな」
そういって剣を鞘（さや）におさめ、背をむけて歩き出した。
「ふん」
鼻を鳴らすと、〆裂は、剣を鞘（さや）におさめてしまい、ジンを見送るだけで、それ以上、なにもしようとしなかった。
レオン・ドラゴ軍が退却態勢に入る。ソンタグやカノンやバロイが追おうとする。苦しそうな息をして膝（ひざ）を屈していたイースも立ち上がる。
あたしたちクラウドの追撃をふせぐように、2人の女戦士とレオン・ドラゴの騎士の十数騎が立ちふさがった。
「きさまらに、ここからさきをいかせない」
アンジェラとエピタフィラがそういって、追撃しようとするあたしたちをにらむ。
「見上げた心意気だ。

しかし、これも戦のならい。手かげんはしないぞ」

ボノがそうさけんで、さいしょに突っこむ。はげしい闘い。

死を決し、獅子奮迅の闘いをするアンジェラは、膂力にすぐれ、強力さにおいては、メタルハート以上だ。しかも、命をかけた者の強さって、はんぱじゃない。

そのアンジェラと互角に剣をまじえるイースは、すでにジンとの闘いで全身に傷を負っていた。まぢすごい。しかも、なぜだろう、イースの眸がだんだんと澄んだしずかさを湛えはじめている。それは死力を尽くし鬼気せまるアンジェラとは、まったく対照的だった。

あかるい、うすい青の湖みたい。

ちなみに、〆裂は、もうやる気をなくしていて、岩に坐ってギターを弾いている。くわえタバコで。

あたしの眼には、イースがやや押されているように見えていた。だが、はげしくイラだっているのは、アンジェラのほうだった。ふり下ろした渾身の一撃がかわされ、大剣が岩に刺さる。イースは、剣がぬけなくなったアンジェラをあえて攻撃せず、しずかなまなざしで見ていた。

「殺せ、おまえの勝ちだ」

イースは、ゆっくりうなずいた。

アンジェラの首を斬りおとす。それを見たエピタフィラは、哄笑し、自らの首を斬りおとした。おちた首が不敵な笑いを泛かべている！　なんて女なの！

イースは、休むいとまも持たず、麒麟の背に飛び乗り、手綱をひいて、崖を落下するかのように駈け出し、

「追撃だ」

断崖を駈け下りるレオン・ドラゴ軍を追う。

あたしたちも非錬斗を乗せて、イースにしたがったが、

「ひやーぁっ」

「わぁーい」

ジェットコースターの100倍こわい！　あたしはさけび、ミーシャ

ははしゃぎ、隘路（あいろ）に降りると、ジグザグなせまい道を岩にぶつかりそうになりながら、激突寸前すれすれの疾駈をする。

ジンは、帝国軍の歩兵部隊と合流していた。

「これ以上、追ってもムダのようだな。むりに闘えば、味方を犠牲にするだけだ。べつのルートでハン・グアリスへもどろう」

イースがそういった。

平地へもどると、雨が吹雪に変わっていた。

〆裂がいう、

「ＡＮＫＡと合流してシルヴィエ正規軍をむかえ撃とう。そのうち、俺のいた第2部隊も帰って来るだろう」

チェバロが、

「ここでわかれよう。

俺は、義勇兵のなかから、有能なやつらをつれてヴォゼヘルゴのようすを見にいく。スパイ活動やゲリラ活動をしておきたいんだ。人選はすでにしてある」

イースが強くうなずき、

「わかった。お願いするよ。

だれかにやってもらわなければ、とおもっていたんだ。

とくにシルヴィエのジェット戦闘機部隊がどこにいるか知りたい。

ログからは発見できなかったらしいからね。

ヴォゼヘルゴに空港なんてあるはずがない（どこの国にもない。飛行機があるのがシルヴィエだけだからだ）が、どこかに滑走路になるような平坦地（へいたんち）があるはずなんだ。

こわいのは、戦闘機とミサイルだ」

「承知しているさ」

チェバロとわかれ、数時間後、ＡＮＫＡと合流すると、エリコの戦勝報告メールがあたしたちを待っていた。

エリコは、ミハイルアンジェロの設計した多石連射投石機（たせきれんしゃとうせきき）で、河をさかのぼって来たシルヴィエの物資運搬船を、つぎつぎと航行不能にし、積み荷を奪ったという。

すぐに帰って来られないのは、戦利品の整理にいそがしいからだ。メールにそう書いてあった。

ところで、この多石連射投石機（たせきれんしゃとうせっき）という新兵器は９機の投石機が１つになったもので、１度に９発撃てるわけだけど、ふつうの投石機が１回投石するたびに、セッティングしなおさなければならないのとはちがい、マシンガンみたいに連続して、びゅんびゅん石を飛ばすことができるらしい。

そんな武器があったんじゃ、敵はひとたまりもなかったろーな。なん万人の兵士がいようが、なん百隻船があろうが、河のはばがそんなにひろいわけではないから、１隻ずつ順番にならんでやってくるわけで、投石機にとっては、絶好の標的だったようだ。

ちなみに、シルヴィエ軍は河の状況を調査する時間がなかったせいか、浅瀬に乗り上げてしまった船も、けっこうあったらしい。

「たぶん、重機装甲部隊が到着して、警護してくれることをあてにしていたんだろう。船には重武装がされてなかったらしい。

ところが、その重機装甲部隊が来なくなってしまったから、はだかの輜重部隊（しちょうぶたい）になってしまったんだろう。やつらにとっては、考えられるかぎり最悪のシナリオだったはずだよ。

だいたい、高性能な科学兵器を持った世界最強の重機装甲部隊が負けるなんて発想はシルヴィエがわにはなかったんだろうからね。

もっとも、ぼくもおもってもいなかったけれども」

イースは、そう解説した。

「やっつけた兵隊たちは、どうなっちゃったの？」

ミーシャが心配そうにきいた。イースがこたえる、

「海軍兵や船員はみんな縄でしばって、甲板にならべ、数隻の船に乗せて、あとは自然な河の流れにまかせて川を下らせ、帰らせたらしいね。

捕虜にしたら、あるていどめんどう見なくちゃいけなくなるし、どうしたって経費がかかる。

身代金をとろう、なんて提案すれば、どうせＡＮＫＡに反対され

るだろうから、おそらくさっさと強制送還しちゃったんだよ、エリコは」

ただ攻撃するだけで終わらないところがエリコらしい。かんぜん復活したみたいだ・・。

この多石連射投石機はエリコよりも、さきに本部に帰って来ていた。むろん、ぜんぶではなく、数機だけど。

見れば、なるほど大きさもすごいが、木製の歯車がたーくさんあって、構造も複雑そうだった。

短い時間で、よくもまあ、こんなものをつくることができたもンだとおもう。

「帝国軍が来るなら、これが役立つわ」

エリコがそういって、これらをさきによこしたらしい。たしかに、そのとおりだ。

本部の周辺の景観が変わっていた。

昨日までは、ジョリーを中心に大きなテントがいくつかあっただけだったが、いまは、投石機や戦利品（大砲や銃や刀や鎧や火砲附自走式装甲戦闘装軌車輛、食糧や酒、金銀財宝のつまった箱、衣類、テント）が山のようにあり、本部の兵士たちは、周囲を壁でかこんで城砦とするために、休むこともなくあわただしく働きつづけていた。

イースは、キャビンに入ると、ロウソクを1本立てて、『ｋＯＯ』をまえにおき、剣をにぎって瞑想に入った。

「もしも、ジン・メタルハートが勝つならば、このＩＥもただの物理的な法則だけが支配する無情の世界。物的な非情性のみがほこらしげにひるがえり、力だけが天帝のごとく栄耀栄華し、獣の欲望が謳歌するくさった世界になってしまう。

ぼくが勝てば、あるべき真実の世界、人が求める人間の世界、ほんとうの人間の世界、理想の大地、永遠の平和の大地が実現する。

命もいらず、名もいらず、すべてを捨てて闘う。この闘い、わがために非ず」

翌日、あたしたちの第1部隊の兵士全員がもどって来た。
はげしい戦闘と山岳地帯での行軍で、疲弊し尽くした彼らは、下山し終えても吹雪にさらされ、限界状態。急いで食事があたえられ、睡眠をとるように命じられる。
さまざまな情報が入ってきていた。
すでにシルヴィエ正規軍はハン・グアリスの平原を進軍中で、重機装甲部隊がいなくても、まったく気にするようすはなく、黄砂のように地をおおい、押し寄せて来ているらしい。
ＡＮＫＡがいう、
「レオン・ドラゴは兵を増強して、ジンの指揮の下、シルヴィエと合流した。それだけじゃない。ヴォゼヘルゴも参戦してきた。フォロワーからのフォローでわかった」
「なんで、ヴォゼヘルゴが！　ボダシェヴィは、死んだのよ！」
って、あたし。
「でも、シルヴィエの属国であることに変わりないからね。くわしくいうと、シルヴィエが進軍のとちゅうで、ヴォゼヘルゴに正規軍将校をのこしてきていて、重機装甲部隊や輜重部隊の損失を穴うめするために、そいつらに、急きょヴォゼヘルゴの軍をまとめ上げさせ、こちらへ進軍させたってことらしいよ。
敵は、昨日の闘いで、10万以上の兵をうしなっているけど、レオン・ドラゴとヴォゼヘルゴの合流で、総計50万にちかい兵力にもどっているわ」
その日の夕方、シルヴィエがユーコニー川を輸送路とすることをあきらめたらしいことがログで確認できたので、エリコたちへ、帰還するように連絡する。彼女たちが帰って来て、投石機がさらに数十機ふえた。
ノーロイの怪力とミハイルアンジェロ設計のタワークレーンや掘削機なんかの建設機械（木製だけど）のおかげで、周囲900メートルの城壁が一昼夜で完成した。食糧や酒をおさめるための大きな備蓄庫もつくられた。

城壁の上に48機の多石連射投石機がならべる。
さらにシルヴィエから奪いとった対空高射砲（!?　なんで、帝国があたしたちと闘うために、こんなものを持って来ていたのか理解できない。だって、飛行機は世界中でシルヴィエにしかないんだから！　エリコにいわせると、そういうところが神聖帝国なんだそーだ）をならべ、戦闘飛行機の襲撃にそなえる。重機関銃や大砲もたくさんある。
あたしたちは、籠城し、シルヴィエ多国籍軍をむかえ撃つことになった。かならず現実をうちやぶってほろぼしてやるぜーっ。
人間のささやかな希望、悲痛な願いをまったく意に介さずふみにじる非情なリアリティ。テメーだけはぜったいにゆるせねー。シルヴィエがそれだ。ぜったい、勝つわ。未来は無限にあるんだから。
城砦の名はＩＦ（Infinite future）。

26　いぶ（Evening）

天候がさらに荒れた。
城砦に籠もるあたしたちにとっては、有利な状況だ。
「チェバロから連絡があった。
ヴォゼヘルゴ国内で、シルヴィエ空軍が戦闘機をかくしている場所を見つけたんだ。朗報だよ。
やつらは、城砦に籠もっているわたしたちを攻撃するために、かならず空軍をつかうはずだから、地上にあるうちにたたかなくては」
ＡＮＫＡがそういうと、〆裂が、
「俺がいって来よう。
シルヴィエの大軍がここに来るまでは、まだ時間がある。今日中にヴォゼヘルゴに入って、明日の朝には帰って来るさ」
そういって、白龍に乗り、猛吹雪の空に1人で消えていった。
あたし、悩んでる。
ムジョーがきかないからだ。むろん、あたしの力が消えたのでは

ない。そもそもムジョーは叡智（えいち）だから、魔法や神通力や呪術や超能力なんかとはちがって、なくなったりあらわれたりはしない。ある特定の相手にきかないだけだ。

なぜだろう。

この世でムジョーでないものなんてない。

じゃ、なんできかないの？

すべてがムジョーなのに。

だれもムジョーから逃（のが）れられないのに。

いま見ているものは、一瞬まえの過去でしかない。意識はつねに過去でしかない。もう、なくなってしまったもの、おもい出でしかない。

こころ Heart の表象 Representation でしかない。

表象（イメージ）とは、なにか。人は物事を考概（イデア）にしてとらえる。イデアは、意味というかたちを持っていて、そのかたちで、あたしたちに理解をあたえる。そういうふうに原的（げんてき）に感じられる。

でも、なぜ、そのかたちで理解は生まれるのか。

意味って、なに者なんだ。

それは、この世界に来るまえからの、あたしのつぶやきだった。

もし、だれかにこんなことをいえば、くだらないたわごとといわれるだろう。「じっさい、現実って、そーなってるンだからいいじゃん」

ほんとうにそうならば、あたしも「ま、いいか」ってゆーとおもう。でも、そうじゃない……

暖炉の炎をじっと見ながら考える。

だれかが来た。

エリコか、ＡＮＫＡだとおもった。

ちがった。

ＲＺＤだ。彼は、あたしのとなりに坐った。

「悩んでるんだな、青龍」

「そうよ。おかしい？

いま、青龍とかいわれても、皮肉としかおもえないんだけどー」
「悩むことなど、なにもないじゃないか。
ユリイカ、おまえもいっていた。なにも知らない、ってな。
そうさ、知ることなどできない。わかるって、なんだ？
この世は・・無常だから」
「わかったようなこといわないで。つか、あんたにいわれたくないわ。
あたしは、青龍の称号を持っているのよ、いちおー」
「そうさ」
「なんなの？」
「いや。
ただ、それだけだ。
それじゃ」
去った。
ただ、それだけ、って、なにがそれだけだったの？　ＲＺＤがいっていたそれって、なにをさしているの？　ぜんぜん、わかんなかったんだけど？
なんか、この感じ、まえにもあったような気がした。茶碗をじっとにらんでいたころをおもい出す。
あたし、じぶんの考えが理解できなくて、しばらく、ぼうっとしていた。
なにかがわかりかけていて・・・・・。なにかがわかりそうで、わからない。
「ユリイカ、なにしてんのよ？」
こんどは、ほんとにエリコだった。
あたし、少しまよったけど、ＲＺＤにいわれたことをエリコに話した。いままで、こういう悩みを語ったことはなかったようにおもう。
「なんか、わかる気がするけど、よくわかんないや。叡智（えいち）はあんたの仕事だよ。

それよか、少し外の空気を吸ったほうがいいかも。いこうよ」
あたしは、だまってうなずく。立ち上がった。篝火（かがりび）の燃える石の廊下を歩く。
２人で城壁の上をわたった。ビューービュー、うなる猛吹雪だ。凍てつく風のせいで生命がよみがえる。
24人の兵士が24の方向を見はっていた。2時間おきに交替して24時間体制だから、延べで1日288人が見はっていることになる。まぢでここぁ戦場なんだね・・・
「エリコは、えらいよね。敵の船をやっつけてさ、たくさん戦利品も持って帰って来てさー」
「そうでもないよ。
シルヴィエ軍も、わたしたちが待ちぶせしてることを予想していたとはおもうけど、地理もよく知らず、水の深いところや浅いところもわからず、ながれのはやいところやおそいところもつかんでいなかったみたいだったからねー。かんぜんな調査不足だよ。力を過信していたんだね。
逆に、こっちは、地元だもん。河のことはくわしかったから、ぜんぜん、有利だったってだけのことよ。
だから、少人数でも、おもうぞんぶん料理できたよ。さすがのシルヴィエ軍用艦も、警護するはずの重機装甲部隊が壊滅（かいめつ）しちゃー、もーどーしよーもないよね。そんなことは想定外だったんだろーね。
まあ、とうぜんだけど。〆裂のような人間って、ほかになかなかいないからね。〆裂が来てから、すべてが変わったよ。
だいたい、彼がいなかったら、こんなに人が集まらなかったとおもう」
「そーか。そーいえば、そうだねー。
それにしても、視界わるいね。これじゃー、敵がちかづいてもわからないよ」
すると、大砲の調整作業をしていたタイラクがふりむいて、いった、

「だいじょうぶだよ。
ガリア・コマータたちが城外を巡回してるし、チェバロも、特殊部隊をつくって城外の木や岩に身をかくしながら、ちかづく敵を警戒しているし」
「そうなんだ。寒いのに、たいへんなんだねー。あたしたちって、こんなにのんきでいいのかしら」
「つーか、そろそろもどろー。冷え切ったよ」
エリコがそういった。あたしは、まったくきぶんが晴れない。
非錄斗が来て知らせてくれた、
「ＡＮＫＡがいっていたよ、『ログでわかるはんいでいえば、帝国主導の多国籍軍がここに到達するのは、おそらく明日』だってね」
つまり、その日はなにごともなくすみ、夕食のあと、みんなで集まった。牛１頭まるごと入るぐらい大きな暖炉のまわりに輪をつくってかこんだ。
ＡＮＫＡ、あたし、エリコ、ミーシャがさいしょの輪だ。それぞれ大きなアームズチェアにゆったりと坐って、深くしずむ。顔がはんぶん、かくれるくらいに。
暖炉の炎は強く、スリッパのさきっぽが焦げそうだった。
外がわ第２の輪には、ジャジュ、非錄斗、エチカ、ユユ、ユリアス、バロイ、カノン。ソファやベンチに、おもいおもいに坐っている。
第３の輪には、ソンタグ、ノーロイ、カブキ、タイラク、ＲＺＤ、ボノ。絨毯の上にちょくせつ坐っていた。
ＡＮＫＡが語りはじめる、
「ＩＥは、理想の世界。そうおもって、ここに来たんだけど、なんだか、そんなの、とおい、とおい、むかしのことのようにおもえるわ。いろんなことがあったわね、ユリイカ」
「なによ、ＡＮＫＡ、もう人生の終わりみたいじゃん」
「ごめん、なんか、ふしぎでさ。
こんなつもりじゃなかったのにね。あんたには、わるいことした

とおもってるよ」
「そんなことない。よかったよ。すごいよかったよ。
だよね、ミーシャ」
「えー、急にふらないでよー。そーかな、わたし、よくわかんないー。なんかつらいことばっかりのような気もするし・・・。
でもねー、正義の意味が学べたよぉー」
ミーシャがめずらしくそんなことをいう。
「ある意味、リアル・ウイルスの存在には、意義があったのかもしれませんね」
ユリアスがそういった。
「でも、いまのままを肯定する気はないよ」
ってボノ。あたしは、
「肯定できないけど、意味はあったんだ・・・正義か。
正義が真実なのは、それが自己超越だからだって、そういっていたよね」
「イクシュヴァーンか。
なつかしいな」
イースがそういった。
「でも、またアカデミアには、いくことになるのね。
あまりうれしくない用事で」
ＡＮＫＡがそういう。だれもがだまった。
薪(まき)が燃えるパチパチという音がするのみ。窓の外は、はげしく吹雪いている。
ミーシャがいった、
「じゃ、ジンにも意味があったのね」
エリコがとおい眼をする。うつむいて暗い表情になった。
あたし、いう、
「そりゃー、あるでしょ。わるい意味がね。意味があるってことと、肯定するってことは、べつだから」
「ジン・メタルハート・・・か」

そうつぶやいて、イースがなんとなく（いいえ、たぶん、意識的に）、ジンとの過去を語り出した。

「かつて、ぼくは、メタルハートに殺されたんだ。

そのころ、ぼくたちは、南大陸（スール）にいた。

羅汎（らはん）が皇帝になって、マーロを世界帝国にした時期だった。

彼女も、ぼくも、まだマーロという国をくわしく知らずにいた。

武人を重んじる気風というだけで、そこに雇われたいとおもっていたのさ。

志願者は、勝ちぬき戦で闘い、生きのこらなければならなかった」

ミーシャが眼を丸くする。

「イースが負けたの？」

「ちがう。

いや、あのころなら、負けていたかもしれない。

ぼくは、ロード国出身の男と闘い、勝ったが、彼の命を奪わなかった。そして、もうその段階で、帝国に志願したことを後悔していた。

試験官は、ぼくを殺せと命じた。ぼくは、試験をやめるといった。

だから、殺さない、と。

試験官は、ぼくを殺す自信がある者はいるかと、みんなにきいた。

自身のある者は、まえに出よ、といった。

そして、ジンがすすみ出た」

「ありそうなことだ」

ＡＮＫＡがそうつぶやく。

「ぼくは、剣をぬかなかった。うしろをむき、そのまま、試験場となっていた闘技場を出ていこうとした」

エリコが声を上げた、

「そうか。

まさか、うしろから斬りつけるような卑怯（ひきょう）なまねはしない、武人ならば、だれでも同じようにおもう。じっさい、ジンも、〆裂に同じことを先日いった。

当時のイースも、そう考えたんだね」
「そう。しかし、ジンは斬ってきた。
ぼくは、殺気を感じ、無意識に剣で受けていた。そして、彼女を蹴りたおして」
「やったー」
あたし、おもわずいっちゃった。
「蹴りたおして逃げたのさ。残念ながら」
イースは、そういって笑った。
ＡＮＫＡがうなずき、
「わかってきたよ、それでジンに報復されたんだ」
「そう。
ぼくに蹴りたおされたせいで、ジンは不合格になった。その夜、ぼくは、あの5人組にかこまれて、ジンと1対1の勝負をしなければならなくなった。
私闘はしたくないと、ぼくは、ことわったが、こんどは背をむける気にならなかった」
「ごもっとも」
ＡＮＫＡが笑う。あたしも笑った。ミーシャも。エリコも少し笑う。
笑いながらイースが言葉をつづけた、
「しかし、ジンは、斬りかかってきた。
ぼくは、鞘から剣をぬいてふり下ろされた剣をはじき、身をひるがえして、かこみを突破し、逃げようとしたんだけど、イヴィラ・ヴィシャスに斬りつけられ、斃れた。
ジンがぼくのうえに跨って容赦なく、喉に剣を刺した」
「怖―い」
ミーシャが声を上げる。
「因縁だね」
ＡＮＫＡがそういった。湯の沸く音がする。お茶にすっか・・・・
夜明けまえ。雪はやんでいた。空が白み、風がまだ強い。

城壁に立つと、シビィレ山脈の白い嶺を背景に、東の大地に黒いむらがりが見えた。

50万の神聖シルヴィエ帝国多国籍軍だった。

「もっと、ひきつけてから攻撃しよう。それから、斥候やスパイのうごきにとくに警戒してくれ」

イースがいった。

やがて軍勢はナイルの洪水のよう、モン・サン・ミッシェルの潮の満ちるように、イフのまわりをかこむ。

咆哮のような鬨の声がとどろき、あちらこちらで馬のいななきがきこえ、剣や槍や楯がぶつかる音が広大な空間のあっちこっちで海のようにざわめく。蹄の音、怒号や哄笑、闘いの開始を告げる喇叭が鳴りひびく。

弓や弩が飛んだかとおもうと、いきなりガトリング銃やモンティニー機関銃、ノルデンフェルト機関銃、マキシム重機関銃が火を噴く。なん発かが破片を飛びちらせ、城壁の石のかどを少しけずる。

「こっちも撃て！」

クラウドの兵たちが敵から奪ったフリントロック式連発銃やカービン銃、コルト・ライトニング連発銃やモーゼル銃、ショシャ軽機関銃やオルガン砲で応戦する。

これら小火器はシルヴィエから奪った総計3000丁の銃や、いく種類もの大砲小砲のなかの一部だった。武器はいっきに豊富になっている。こっちの兵が1千数百人だから、人数の倍以上の火器がある計算だ。

ギギギ、投石機のしなる音がした。やがて・・・

びゅん！　びゅん！

レオン・ドラゴの投石機だ。燃え盛る炎の大石が飛んできた。油をたっぷりしみこませた布が石に巻いてあるのだ。

さらに爆音がとどろく。大砲だ！　弾が飛んで来て、つめこまれた火薬が炸裂する。

大砲って、一口にいっても、すごいたくさんの種類だ。

タイラクが胸壁からながめてたのしそうにいう、
「いや、これは、たまらないねー。
見てよ、カブキ！
ほら、軽架野戦砲M40無反動砲、車載4連装砲架ボフォース砲、6ポンド砲、自動カノン砲、歩兵砲、搬送曲射砲、攻城曲射砲、野戦曲射砲……」
「ロケット・ミサイルまであるぜ。こりゃー、勝てないよなー」
「あんたたち、なにいってんのよ」
あたし、ムカついてそういった。
「あぶない、ユリイカ、城砦のなかに入って。
さあ、こっちも投石だ。砲撃だ。まずは、あれをねらってくれ。
ほら、あれだ、ロケット・ミサイル発射装置さ。
あそこに、あのとおくに見えるやつだ。とどくか。いや、ともかく、あれを重点的にねらってくれ。やっつけないと、城壁をかるがる越えて、砦を破壊してしまうだろう。
まだいたのか、ユリイカ、はやく砦のなかへもどるんだ！」
ミハイルアンジェロがさけぶように、そういう。
カブキとタイラクは、
「そうそう、ユリイカは、もどって。あとは、やるからさ」
って、あたしにいうと、あとは嬉々（ききき）と砲兵たちに号令する。
城壁の上に、ずらりとならぶ大砲と砲兵たちのところを順番にまわって、さまざまな指示を出し、ときには砲兵に替って操作し、またときには、立ち止まって監督する。
列をなすクラウドの大砲がいっせいに火を噴いた。
1分間に270個の大石を飛ばす多石連射投石機（たせきれんしゃとうせきき）がびゅんびゅんびゅんとたえまのないうなりを上げる。
が、しかし!?　やばい！
「あぁぁぁーっ！」
ジェット戦闘機だ！
「ふひょ〜、制空戦闘機イーグルに、航空支配戦闘機ラプターだ！

すげぇー」
こら、カブキ、よろこんでるばあいかよ！
ミハイルアンジェロがすぐに指示を出す。
「対空高射砲だ。すぐに準備するんだ！」
飛行機から攻撃を受けたらクラウドの城壁なんか、なんの意味もない。
「ユリイカ！　はやく砦に！」
ミハイルアンジェロの悲痛なさけびに、やむなくあたしも建物のなかに入る。
ものすごい音がして砦全体がゆれた。
「なんなの！」
城壁から降りて来た兵士がいう、
「イーグルを1機おとしましたよ！
墜落して、イフの城壁に激突したんです！　みごとでしたよ！」
また砦がゆれる。
「戦闘機からの爆撃だよ」
あとから降りて来たイースがいった。
イースは、駈けつけて来た迦楼羅から鎖帷子（くさりかたびら）や楯や兜を受けとり、その場ですぐに出陣の準備をととのえはじめた。
「イース！　だめだよ、相手はシルヴィエのジェット戦闘機よ」
「だから、いくのさ」
「そんなーっ。
むちゃよ、ケガだってしてるのに」
「心配ないよ。
あ、それから、迦楼羅、麒麟の準備をしておいてくれ。
じゃ、ユリイカ、ぼくは、したくがあるから」
そこへＡＮＫＡが駈けつけて来た。
「準備がはやいわね、イース。
でも、まだよ。
しばらくは、砲撃や投石で敵の力を弱めるの。砦を出て闘うのは、

それからよ。
なんのために、敵の補給路を断ったとおもっているの？
籠城（ろうじょう）ってのは、ふつー、持久戦なんだから。
城壁の外へ出るのは、まだまだはやいわ」
「わかっているよ。
だが、ジンをたおせば、闘いがはやく終わる。そうすれば、いたずらに、おたがいの兵が死ぬことはない」
「そんなことないわ。
この軍事行動を指導している主体は、あくまで、世界征服をもくろむ帝国シルヴィエよ。
ジンがいてもいなくても、モチベーションに変わりがあるとはおもえないわ」
「論理的にはね。
しかし、きみは、ジンが兵士にあたえる影響をあまく見ている。
彼女は、鬼神だ。まさに戦闘の神の化身だよ。
彼女をたおさなければ、平和はない」
「わかった。
でも、今日のところは、城壁にハシゴをかけて上って来る兵士を退治してくれない？」
じっさい、城壁のそばまでたどり着いて、攻城用のはしごをかけようとする兵士がなん百人かいた。
だが、それは、ぜんたいのわりあいからすれば、ほんのわずかだ。
ほとんどがあたしたちの投石や砲撃でイフにちかづけない。
ちかづいても、銃で撃たれ、敵兵全体の数千分の1がどうにか城壁にたどり着くだけだ。
「〆裂から連絡があった。
戦闘機をほとんど破壊した、らしいんだけど、数機をのこしてしまって、それがこっちへむかったようだ、……ってね」
ＡＮＫＡがそう教えてくれた。
「いま、まさに来てるわ！」

「ええ、そうね。
でも、おそらくは、いま見ている6機しかのこっていないみたいね。1機は撃墜したようだし。
ひきつづき地対空砲で、なんとか、がんばって撃退しよう」
またも轟音！
「こんども墜落の音ね。なんか、わかるようになってきちゃった！」
「そうよ、ユリイカ。また撃墜したようね」
イースがいう、
「うん。
どうやら、戦闘機は撤退しはじめたようだね。
ジェット音がとおざかっている」
「さあ、だから、籠城（ろうじょう）よ。城壁を守って、イース」
「ああ」
夜になった。
不安な夜だった。寝ているあいだにまた戦闘機が来たら、ロケット・ミサイルが飛んできたら・・・
〆裂が銀のジョッキを片手に笑った。
「心配するな。
シルヴィエはその気になれば、大陸間弾道ミサイルではるか数万キロの南大陸（スール）でさえ攻撃できるんだ。
こんなところ、いつでも爆撃できる」
・・なんなんだ。なぐさめなのか？
夜も眠らずに警戒がつづく。みんな興奮し、昂ぶっている。やたら声が大きい。やたら、せわしい。いつもだれかが廊下を走っている。
寝てない人ばかりだ。対空高射砲はつねに発射できるよう、兵が配備された。カブキとタイラクは、交替で城壁に待機する。
あたしは・・疲れて自室でスヤスヤ・・・う～、ごめんねー。
黎明（れいめい）、そして、日が昇ると同時に、麒麟にまたがったイースが門をあける。そのうしろ、ストランドと19名のガリア・コマータたち

が追従する。
　たった20人で数十万の敵に、ジン・メタルハートのいる場所に出ていった！
「非錬斗」
「どうしたの？」
「とうとう、イースがいってしまったわ。お願い、麒麟を出して！」
「しかし、ユリイカ」
「だまって見ていられないわ。だって、あたしのムジョーがなんかの役に立つかもしれないじゃない」
「わかった。いこう。ただし、危険を感じたら、すぐひき返すよ。いいね？」
「いいわ。はやくいこう！」
　空を飛んだ。
　すさまじい戦況だった。わずかな人数のガリア・コマータに数百、数千のシルヴィエ、レオン・ドラゴ、ヴォゼヘルゴの兵が群がる。けど、その敵軍の疾風怒涛の大海をかきわけて、雷霆神（らいていしん）のごとく、つぎつぎと斬り裂くイースは、別人みたい。ガリア・コマータの先頭を駈けて、数百数千の敵軍の渦中へためらいもなく突っこんでいく。だれもが彼女を止められない。
　どんな強く大きな兵士も、まるで木の葉のように、かるがると蹴ちらされてしまう。
　ああ、だけど、あれは、ジェット戦闘機だ。５機いる！
「ユリイカ、しっかりつかまって！」
　非錬斗がさけぶ。麒麟を急上昇させる！
　ビュン！　え？　はげしい閃光、そのあとに爆発音。空気が振動する。
「あぶなかった、ミサイルだよ」
　イフの城壁が大きく毀（こぼ）たれた。ジェット戦闘機がさらに爆撃を加える。５機のうち、１機がガリア・コマータたちを機関砲バルカンで撃ちまくる。

科学兵器に対して騎馬の傭兵たちは、あまりに無力だ。数騎がかんたんにふっ飛ばされる！　ああ、ひどい。

さすがのイースもバランスをくずす。そのときだ、敵兵の射た矢がイースの腿に刺さった。

うごきが一瞬にぶる。

たちまちシルヴィエの機甲歩兵や装甲騎兵がイースを群がり襲う。

彼女は、それでも超人的な強さで敵をつぎつぎと斬る。

地をすれすれに飛ぶかとおもうと、高く舞って剣をふり下ろし、瞬時によこへ身をかわして、数人の重装甲騎士を斬る。

だが、やがて疲労が。しだいにうごきがにぶる。

そこに砲撃や空からの銃撃が襲う。数百の重装騎兵が大剣や槍や戦斧をふりかざしてせまって来る。

ガリア・コマータたちもつぎつぎと斬られはじめる！

イフからの対空高射砲がつぎつぎ火を噴く。１機を撃墜した。

城壁からの砲撃で、イースたちを援護する。

ジン・メタルハートが返り血で血まみれになった殺戮神のすがたで、そこへあらわれた。

27　ＬＡＳＴ　ＳＴＡＮＤ☆

麒麟に乗ったイースは、はげしい戦闘でぼろぼろになりながらも、龍鳥に乗るジンを見つけてさけんだ。

「ジン！　見つけたぞ！　弑殺者、裏切り者、大虐殺者、卑怯者、きさまに今日こそ、その大罪を贖わせる！」

「ふ、イースか。そこにいたか。

愚かなやつ、名乗り出なければこの戦いを生きのこれたかも知れぬのに。

このわたしに敵うとおもうか」

「おろかなやつ。そして、哀れなやつ。

正義こそが爲すべきすべて。もし、そうでないならば、むしろ、死んで幸福だ」

「笑止千万、リアルをさとれぬ愚者」

「未来を望むことこそがリアルだ、真実を抱く魂が生命のリアルだ」

イースが麒麟を、ジンが龍鳥を、たくみにあやつって、飛ぶように移動しながら突撃し、激烈にぶつかりあった。

ジンの剣がどす黒い炎と燃え、イースの剣は氷河の深奥のように蒼く冴えている。黒い炎が戦闘神ジンのすがたになって、メタルハートの頭上にそびえ、イースを威嚇した。

彼女たちは、大剣を大きく、鞭のようにふりまわし、円弧を描いてながれるように位置を変えながら、数合うちあう。戦闘神の威光によって、天を劈く霹靂のようなジンの剣がイースの剣をたたく。衝撃で剣もイースも麒麟から墜ちる。

「決まったな」

そういってジンは、不敵に笑い、とどめを指すために龍鳥から降りた。

あたし、あせって非錄斗にいう、

「やばい、たすけにいこう」

しかし、中空のあたしたちのまえに黒い衣服の男が立ちふさがった。

「バリユース！」

男は、無言でリボルバーをあたしにむけた。

「ムジョー」

効かない。

くそ、やっぱ、ダメか。

なんでだろ、なんで。

そのとき、ケータイが鳴る。エリコだった。バカ、いま、出られないよ。

非錄斗が麒麟を急降下させる。弾丸があたしのそばを数発かすめた。ケータイを手にして受話する。

「ユリイカ、どう、だいじょうぶっ？」
「エリコ、いま、話していられない。あたしもイースも死ぬかもしれない。
ありがとう、あんた、すげーいいやつで、大好きだったよ。あたしのことも、わすれないでね」
「バカ、どうしたのっ？」
「バリユースよ、効かないのよっ」
「しっかりしてっ、やつら、管理者システムの一部だもん、『常（ジョー）』が保（たも）てるよーに設定したダケだよっ！　いいじゃん、いつも無常じゃやおかしいよ。それじゃ無常じゃなくて常じゃんかっ！　ホントの無常はたまにゃ常になるのよっ！　それが無常ってコトじゃんっ！」
そっか。
あたしのなかで、ＲＺＤの言葉とつながった。考えてみれば、あの茶わんのコトじゃん。つまり、タカフシ先生の教えだ。だから、あたしは、青龍の資格がとれたんじゃナイ。（笑）
常（ジョー）も無常（ムジョー）だよ。なーんだ。

眞曰（しんいわく）、文趣眞奚焉にしあるとも、究竟（くきょうなり）也

龍曰（りゅういわく）、巻子（かんす）皆同（みなおな）じう究竟（くきょう）を云（いう）か

眞曰（しんいわく）、隹文究竟の所以（ゆえん）

わかったぁ。
「非錄斗、止まって」
「どうして、ユリイカ？」
「いいから止まって」
大磐（だいいわ）の上に降り立つ。バリユースも。
「これで任務完了だ」
あ、はじめてしゃべった。
「そうね。もう終わるんだから教えてよ、ね、なんで、あたしを殺すの？」
彼の表情は微動もしなかった。無言だ。
だめだ。こいつ、完全に環境的人物だ。キモい。

「わかったわ。じゃ、生かしてもムダね」
バリユースが一瞬、なっとくいかない、って顔した。こいつでも表情があるんだ。あたし、いう、
「ムジョー」
バリユースがリボルバーの引鉄（ひきがね）にかけた指に力を入れる。
「ムダな抵抗だ、ユリイカ」
「そうなのよ。だから、ムジョーなのよ」
「なに？」
バリユースが顔をゆがめ、さらになっとくいかないって表情をした。そのゆがみは尋常ではない。
止まらなかった。
への字にまげた口はへの字を超えて逆Uの字になる。口もとがあごをまわっても、止まらない。どんどん裂けつづける。バリユースの顔が驚きと恐怖とに変わる。驚きと恐怖のためにしかめた眉の、眉間のたてジワが深くなる。深いたてジワは眉間でとどまらず、鼻のさき、あたまのてっぺんまで深く入りこむ。ひからびはじめた皮膚がひびわれ、くずれおちた。
髪はぬけおちて、地に着くまえに粉となって消える。服がほつれてバラバラの糸クズになり、リボルバーは錆びて砂の塵（ちり）となる。筋肉が腐って骨から脱落し、おちながら、乾燥した繊維質になった。骨はくずれおち、地にふれるまえに埃（ほこり）となって風に飛ばされ、見えなくなる。
周囲で闘っていただれもが止まった。戦場のまんなかに異様な沈黙の空間ができていた。みんながあたしを凝視していることに気がついた。ジンの顔さえ青ざめている。
そう、だれもがじぶんがムジョーであることを知っている、だれもが恐れている。あのジン・メタルハートですら勝てない。あたし、理由はともかく、この時点でじぶんがムジョーを極めたことを明瞭に感じた。
イースは、そのあいだに剣をひろう。

「こっちを見ろ、ジン。まだ終わってないぞ」
ジンがわれに返って、すぐに体勢を直した。イースを嘲笑う、
「愚か者。いまの隙に、わたしを斬っていれば、おまえが勝っていたものを。
いまだに正義ぶるか。ふっ。
この世とは、ただ、現実でしかない。強い者が勝ち、弱い者が負ける。それが真のリアル・ワールドだっ！
とうぜんのことよ、現実が真実」
「虚し。
生命を喪った者に、神は、かがやく栄誉をあたえない。
おまえは、すでに負けているのだ、ジン。ぼくは、きさまを見切った」
イースが大剣をふりかぶった。そして、
「現実は真実ではないっ！　色即是空というがごとし」
気勢とともにふり下ろす。
あざけるようなメタルハートは、
「懲りぬやつめっ」
と吐き捨てるようにいい、剣をよこにしてイースの剣を受けた、いや、受けたつもりだった。
イースの氷白青の剣が黒き炎の剣を裂断し、ジンの兜をうち砕いた。信じがたい事態に眼を剥く女豪傑。イースは、からだをまえのめりにたおすようにメタルハートの肉体を縦裂し、片ひざを大地に突く。
そのすがたは、あたかも祈る人のようだった。蒼く凍てつく剣が裂き終えてもいきおい止まらず、地すら裂こうとするかのように、深々と地面に突き刺さる。
時間が止まった瞬間だった。
左右に裂けて2つになったジン・メタルハートのからだが大量の血を噴いて東西に斃れる。
イースは、しばらくうごかなかった。

無敵の戦士が裂かれた。信じがたい事態に、すべての兵たちが止まる。あぜんとして、ながめるだけだ。

イースが立ち上がった。

「この大地に、永遠の平和を」

天をあおぎ、そうつぶやく。そして、周囲の兵士たちを、あたかも見おろすかのように、超然としてゆっくり見まわした。

われに返ったシルヴィエ、レオン・ドラゴ、ヴォゼヘルゴの兵士たちが口々にさけびながら、イースに猪突（ちょとつ）する。

「殺せっ、生かして帰すなっ」

怒涛（どとう）のように押しよせる数千人の兵士たち。

あー、ひきょーだよー。あーあ、じゃー、しゃーないな。

「ムジョー」

「ああっ！」

襲って来た敵の剣や装甲がつぎつぎ砂塵になる。驚愕（きょうがく）の表情を泛かべ、信じがたいといわんばかりに顔を見あわせている。

イースは、ゆっくりと歩みよった。兵士たちがあとずさる。

イフの門がひらかれた。クラウドの義勇の戦士たちが飛び出し、シルヴィエ勢を襲撃する。斬り、うち、たたき、刺す。

形勢逆転？　いや、そんなことはない。

だって、まわりは圧倒的なシルヴィエ帝国軍だ。数千人をムジョーでやっつけたからって、ぜんぜん、おいつかない。ぜんたいから見れば、数千なんて、ほんのわずかな数でしかない。

たちまち新たな怒号が上がり、ふたたびなん万ものシルヴィエ兵があたしたちに襲いかかって来る。こりゃ、ダメだ。

そのとき、バイクに乗った集団がとつぜんあらわれ、戦場を縦横に切り、シルヴィエ軍を妨害した。

「ヨセフ！」

イースがさけぶ。

ヘルメットを上げて、ヨセフが微笑む。

「やはりＡＮＫＡのいうとおりだな。

シルヴィエなんかといっしょにやっていても、少しも面白くないよ。僕らも仲間に入れてくれないか」

シルヴィエを裏切って、あたしたちの味方に？

ああ、それでも圧倒的に不利だった。敵兵の数は大地をおおい尽し、終わりがあるようにはおもえなかった。空には、ジェット戦闘機が轟音を上げて飛び、あたしたちを爆撃する。

ぅわっ、ひゃあ！　あぶない！

つぎつぎとはげしい爆裂が！　爆風と破片と土くれが飛ぶ。粉じんが上がり、たくさんのクラウド戦士が血まみれになって、たおれる。

ああ、あたしのムジョーがこの敵ぜんぶにつかえたら、すごくいーんだけど……

ん？

つーか、なんでつかえないんだろ？

あたしの問いは問いなのか。ラグナレクの言葉をおもい出す。

ふつーに、つかえるンじゃナイ？

「シルヴィエの兵士たち、降伏しなさいっ！

あたしは、青龍のユリイカ、解脱して青龍の神力を持つ者よ。いうことをききなさい。

さもないとっ！」

ムジョー……瞑目（めいもく）して唱える。あたしは、こころをすましながら、巨大な宇宙の、圧倒的な存在を感じた……

広大なこの大地さえ、海さえ、大きな宇宙の空間のなかでは、砂粒の大きさにさえもならない。

はてしない太陽系。しかし、銀河系のなかでは、同じく砂だ。銀河系はまた、大銀河のなかの塵にすぎない。

この宇宙には、いくつもの大銀河があり、膨張しつづけている。しかも、その膨張は時とともにおとろえるのではなく、時とともに速度を上げている。信じがたいことに、加速しつづけている。

まるで生命のように。

無限に、巨大化しつづける。
あたしは、鼓動を感じた。生きている。すべてが生命を持っている。生まれ、滾り、ほろび、こわれ、焦燥し、躍動、拡張、氾濫、つぎつぎ増え、より高度に、より複雑に、より強く、よりリアルに、さらなる高みへむかい、現在の自己を越えた自己になろうとしている。
自己を超越しつづけている。
それがムジョーだ。
世界のすべてが望んでいるのに、それがかなわないはずない。ほらっ☆
ムジョームジョームジョームジョームジョームジョームジョー……
ああーっ！
見て、すごいよっ！
あっちこっちで起こるさけび、シルヴィエ兵たちの悲鳴、恐怖におののきさわぐ声。壮麗な騎士も、装甲された科学部隊も、華々しい将校も、いかめしい将軍も、髭面の粗暴な兵卒も、冷酷そうな特殊部隊も、みんな慄いている！
大砲やミサイルは錆のかたまりとなって、くずれていく。ジェット戦闘機ラプターやイーグルの翼がばらばらと朽ち、火を噴いて墜落する。神聖帝国軍の剣や銃がつぎつぎと錆びおちて、風に消える。それがなん百、なん千、なん万、なん十万もの人間にひろがっていく。壮大な光景だぁーっ。お、おしっこちびりそぉーーー……。あたしって、まぢ凄すぎぃ!!
クラウドの義勇兵たちは、息を吹き返し、丸腰の数十万人の兵士たちをたちまち追いこむ。多国籍連合軍はバラバラになって潰走しはじめた。
圧勝!?
いうことをききなさいといいながら、相手のこたえをきくまえにムジョーをやってしまったのは、ちょっと失敗だけど、まあ、いいじゃんか、そのくらい（笑）。

イースが驚愕の表情で、あたしのほうを見る。
「ユリイカ、ぼくらが勝ったんだね」
「そうよ、あたしたちが勝ったのよ！」
みんなが口々にこうさけぶ、
「勝利だ。
勝ったんだーっ。
正義の勝利だっ。
真理の叡智が勝利したんだ！」
あたしたちは、みんな、歓びで躍り上がり、大声を上げて抱きあった。凱歌を歌って行進し、意気揚々と帰還する。
ジョリーに帰ると、ＡＮＫＡが待っていた。
「シルヴィエの軍は、シビィレ山脈へむかって潰滅的な状態で退却中よ。なにしろ、丸腰だからね。
軍の態勢を立て直して、兵をまとめようとする者もいないようだわ」
まぢ？
ちょーかんぜん勝利？
でも、クラウドも多くの犠牲者を出していることをわすれてはいけない。
たとえ、ネット上の世界であっても。
それでも、あたしたちは、偵察隊を出し、状況確認することを優先させた。偵察以外の戦士たちは、甲冑をぬぎ、武器をおいた。手足を伸ばし、休息する。日が暮れるころ、偵察隊が周囲にまったく敵が潜伏していないことを報告した。
あたしたちは、炎を熾し、全員で国としての慰霊の儀式をとりおこなった。
ＡＮＫＡが戦没者のなまえを１人ひとり読み上げる。深く頭をたれて、みんなが哀悼の意をしめした。
その後は、あっちこっちで自然発生的に酒盛りが勃発し、勢力がしだいに統合され、シルヴィエの葡萄酒やウイスキーやビール、チ

ーズや塩漬け肉やオリーブやパスタやサラダ（塩漬けの野菜）や乾燥パンやバターや豆や魚の缶詰による、一致団結した1千人の大宴会になった。

炎が心地よくあたたかい。

あたしは、疲れ切っていたので、すぐにベッドのなかに入った。なんども眼がさめた。

眼がさめたのは、風が鎧戸（よろいど）をゆらす音や、またもや降りはじめた氷雨のせいばかりじゃなかった。

いろいろなこわい夢を見た。

不安や恐怖はかんたんには消えないものらしい。いつか時間が解決してくれるだろうけれど……

最終的には、とっても深く、深く、ぐっすりと眠った。

朝、あたしは、起きると、サイコーのきぶんでＡＮＫＡにいった、

「次は、いよいよアカデミアだね」

28　アカデミア再び

シルヴィエ多国籍軍は武器も食糧もなく、ヴォゼヘルゴへ逃げ帰ったが、ヴォゼヘルゴ愛国主義者（パトリオット）による容赦ない苛烈なゲリラ的攻撃に遭（あ）い、まったく軍隊の体裁（ていさい）をもたない最悪の状態にまでおちいった。

パトリオットたちは、同国人であるヴォゼヘルゴ兵に対しても過酷で、シルヴィエに追従した政府関係者や軍人を裏切り者として、容赦なく追いこみ、攻撃し、死の刑罰をあたえた。

シルヴィエ兵たちは、食べる物も、防寒の装備も、なにもかもをうしない、ユヴィンゴへの帰還すらかなわず、バラバラに逃走するも、シルヴィエ兵狩りによって、つぎつぎと殺されるか、とらえられるかした。

かくして、南下したシルヴィエ軍は全滅したが、ユヴィンゴに駐留していた軍の全軍が南下したわけではないから、とうぜん、ユヴ

インゴにのこった軍がいるわけで、そいつらが本国からの支援でいつしか軍を増強して、ふたたびシルヴィエの脅威が復活し、もとの緊張状態にもどってしまうのは、あきらかだった。

そのとき、ヴォゼヘルゴのパトリオットたちがたどる運命は凄惨なものとなるにちがいない。それがわかっていても、積年のうらみはすさまじく、憤怒の炎となって、ほとばしったのだ。シルヴィエ兵を殺し尽くした。

なぁんて、人ごとみたいにいってるけど、あたしたちクラウドも、同じ運命の上にいる。

まあ、しばらくは安全だとおもうけど。

帝国軍がふたたび態勢をととのえるまでは、時間がひつようだろうし、なによりも、ヨセフがユヴィンゴ領内にもどって、滑走路をシルヴィエ製の爆弾で大々的に破壊したからだ。

空爆の危機からは、とうぶんのあいだ、まぬがれられる。

ちなみに、ヨセフは、あたしたちと同じ国民になった。

クラウド勝利のニュースは、全世界を駈けめぐり、世界に衝撃をあたえた。はじめて帝国が敗北したのだ。世界が震撼した。

無敗のシルヴィエの歴史的な敗北。

かっこよくゆーと、歴史がうごいた瞬間ってやつだ。

結果的に、北大陸全土の制覇をねらうシルヴィエの南下政策は大きく後退した。

シルヴィエ敗戦のニュースが知れわたると、ユヴィンゴ王国でさえ、レジスタンスの活動が活発になった。

神聖帝国の駐留軍が国境附近（ユヴィンゴとシルヴィエは境を接していた）まで数カ月間、撤退した。

マーロ皇帝の羅汜（らはん）は、北上政策を急ぎ、東西南北大陸裂海洋（マル・メディテラノ）をわたる軍艦数千隻にもおよぶ大艦隊の製造を工廠（こうしょう）に急がせた。

同時に、羅汜（らはん）は、クラウドに軍事協定を打診してきた（ソッコー断ったが）。

ヴォゼヘルゴでは、民族間の紛争が停止し、和解にむけたうごき

が時代的な潮流であるという意見が一部の者たちから上がりはじめた。結果的には、一時的だったけど・・・。

レオン・ドラゴでは、全軍を挙げて参戦したこの戦いで、潰滅状態におちいったため、苦渋の選択がなされた。

あたしたちクラウドに全面降伏してきたのだ。

すべての武器や装備がムジョーによってなくなってしまったんだから、彼らは、そうするしかなかった。

ＡＮＫＡは、レオン・ドラゴをクラウドに合併することを、ネット上に宣言した。

むろん、シルヴィエを怖れて、この北大陸では合併を承認する国はなかったが、南大陸では、すべての国が承認と賞讃と祝意を表明してきた。西大陸の承認は少なく、東大陸の承認は多かった。

まさに、超大帝国の勢力分布図のとおりに賛否がわかれたことになる。

ともかくも、クラウドは国家の規模を拡大し、強い国々のなかま入りをすることとなったのだ。

一ヵ月後、生きのこった難民たちは（あちこちにおびえてかくれている難民をすべて見つけて救出するには、予想外に時間がかかったが）、全員帰国がかなった。

帰国後も、ヴォゼヘルゴやクラウド（レオン・ドラゴ合併で、国力は数十倍になった）が公費で、生活支援や物資配給、住宅の提供、ふたたび仕事をはじめるための補助金の支給をおこない、難民たちは、幸福を（かんぺきじゃないけど）とりもどした。

あたしたちが旅立てる条件がととのったことになる。

「やっと、最後の解決にいくのね」

あたし、そういった。

出発の日は土砂降り。

あたしたちは、ジョリーに乗って、なつかしい道を遡行した。ただし、今回は警護や雑役をやらせるために、兵士数十名を、龍馬の牽く龍車7台に分乗させて、随行させたので、あたしたちは、ほと

んどすることがなかった。
まぢ出世したなーって感じ。
レオン・ドラゴの合併で、財政的には、かなり裕福になっていた。
ジョリーを改造して、金銀や螺鈿（らでん）や漆（うるし）や大理石や漆喰（しっくい）やウォールナットやマホガニーをふんだんにつかい、豪華（ごうか）で贅沢（ぜいたく）なものにした。
寝泊りにも、りっぱな旅館をつかい、車中泊などしない。大名みたいな感じだった。
旅の中心メンバーは、オリジナル・メンバーの女の子５人男の子５人に、ユリアスとＲＺＤとソンタグ・バロイ・カノンだ。
クラウドで留守番するメインの人は、〆裂。
はっきしいって、彼にまかせておけば、あたしたち、永遠に国にいなくてもいいぐらい。じっさい。
天候はよくないが、旅はとても順調だった。
すでに１か月まえにアカデミアの事務局に申請し、大聖堂の地下に入る許可はとってあった。
あたしたちは、聖櫃（アーク）のＷの素材がなんであるか事前にしらべ、同じ素材をとりよせ、それをつかってＷの欠けた部分をおぎなうＶのかたちをつくっていた。お手製『Ｖ』だ。
接合面を正確につくらないとうまくくっつかないので、アカデミアの事務局にたのんで、欠けたＷを写メに撮って送ってもらい、微妙な凹凸があうように精密に再現した。
その仕事をミハイルアンジェロとミーシャが精魂こめておこなった。かんぺきなし上がりで、ぜったいにぴったりあう！
・・はずなんだけど。
エリコがそれを手にして、いぶかしげにいう、
「うまくいくかなー」
あたし、きく、
「なんでよ、かたちあわせたんだから、嵌（は）まるっしょぉー」
ＡＮＫＡが笑い、
「ただのパズルじゃないからね。

かたちがあえば嵌まる、ってわけじゃないよ。

コマンドが発せられて、プログラムが作動するような、なにかがなくっちゃ、かたちがあっても、嵌まらないとおもう」

平原を横断し、森をぬけ、丘陵地帯に入り、けわしい山岳がちかづく。雨が雪になる。

坂道はしだいにきつく、せまくなる。登ったかとおもえば、せまい峡谷に入り、それでも、じょじょに高度が上がっていくのがわかる。木が低くなり、数が減り、岩がいかつく、荒々しくなっていた。植物は見えなくなり、いかめしくとがった岩岳の世界。

吹雪だ。

やがて、岩山が見えてきた。アカデミアの尖塔は、あの日のまま、その上にそびえている。掘削された道を登った。アカデミアの門衛は、無言だった。雪風が虚しく石壁を敲く。

すべてが懐かしくおもえたが、同じには見えなかった。

大聖堂の偉容は雪雲の曇天を半ばおおいつくしている。石づみの壁がかなしく、切なくおもえた。

外国から来る学者のための大きなホテルを予約していた。

パレス・ガルニエ（パリのオペラ座）のように絢爛な建物で、内装の大理石は、やわらかな黄金いろにかがやいている。

あたしたち兵士もふくめて総勢50人ちかい。ワンフロアは貸し切り状態だった。

荷物を整理すると、あたしたちは、すぐに出かける。

ＡＮＫＡ、ジャジュ、ユリアス、エリコ、エチカ、ミーシャ、ユユ、あたし、非錄斗、イース、迦楼羅、ソンタグ、カノン、バロイ、ＲＺＤだ。

なつかしい、せまい路地をいくつかとおる。背の高い建物にはさまれたこの狭隘な裏路地からも、空をなかばおおいつくして、そびえる大聖堂が見えていた。

歩みにつれ、巨大なすがたがちかづく。

この日このとき、大聖堂にはだれもいなかった。あたしたちは、

管理事務所にまわる。若い黒僧衣の男が鍵束を持って案内してくれた。鍵の束がジャラジャラと鳴る。

なかに入ると、どこかからイタルが見下ろしていそうな気がした。ユーザーが死んでも、永遠にうごきつづけるアバター。あたしは、そのまなざしを感じた。みんな、知らないふりをしているが、きっと、なにかを感じているはずだ。

まっ暗な階段を下り、聖なる部屋のまえに立った。

聖櫃（せいひつ）の部屋に入る。

「さあ、嵌（は）めてみようか」

ＡＮＫＡがいった。あててみる。接合面のかたちはあっているようだった。けど、嵌（は）まらない。

29　kOOが奥義なら、奥義なんざないってコト・・・　ﾁｬﾝﾁｬﾝ

「やっぱしダメかぁ。

かんたんにはいかないようだねー」

エリコが嘆息（たんそく）する。

なにがいけないんだろと考えながら、みんな、お手製の『Ｖ』をじっと見ながら、だまっていた。

シーン。

そのとき、廊下に足音が。

「しょくん、やはり、来たか。

もっとも、しょくんらが来なくとも、運命にみちびかれて、ほかのだれかが来ただけのことだが・・・

さだめというものは、ふかしぎなもの。

結果は決まっているのに、最終の決着を見るまではこたえがわからない。だから、運命というものはないにひとしい。

時折、人は、運命をあきらめるというが、それは不可能事だ。神だけがそれをなせる。

神があきらめたいとおもうとすればだが・・・」

明澄な笑い声がひびく。
全身白いすがたの、流麗な顔、誇り高く神々しいその人。
「学長っ!?」
あたしやミーシャは、すっとんきょうな声を上げた。エリコは、
「あっ」といったし、ＡＮＫＡは、眉を上げた。
男の子たちも同じようなもンだったが、イースだけは、顔のむきを変えることさえなかった。
イクシュヴァーンは、神が天空から降臨したかのように、まばゆく炎のような雲に身を包まれている。
彼は、宗教的な厳粛さで、いった、
「すべては、ＩＥの望むがままに成就した。
すなわち、すべては、しょくんが望んだとおりになった」
ＡＮＫＡが糺していう、
「それは、いったい、どういうことでしょう、学長」
イクシュヴァーン、微笑む。黄金の微笑。それは、人を真理への難問へと惹き誘い、魅了する、神なる哲学への誘惑者・・・・みたいだった。
「言葉どおりだよ。
アカデミアは真理を求める」
「リアル・ウイルスがわたしたちの望みだったというのですか？」
「しかり。私の教えたとおりだ。教えは少しも変わらない」
ＡＮＫＡがあたしたちのほうをむいていう、
「ムダね。
彼は、環境的な人物。ただ、プログラムにしたがってうごいているにすぎない。
ウイルスにやられたプログラムの末端にすぎない」
ＲＺＤがつぶやきのようにいう、
「そうかもしれぬが、俺たちもまた、自由意志設定みたいなものだ。
プラグラムと大差ない。ふ。そうじゃないか？
俺たちは、じっさい、なにもわかっちゃいない。そもそも、わか

るとは、なんのことなのか。どういうことなのか。

賢しい人がなにかを知っているといったって、なにもわかっていない人となんら変わりはしない。３歳児とだって、変わらない。眠っているのと変わらないし、死んでいる者とも変わらない。

世の価値にとらわれて一喜一憂するすべての人のおもいは空まわりにすぎない」

あたし、なぜかそのとき、ＲＺＤがイタルに似ているような気がした。その暗欝で、狂犬のような滾ったまなざし・・・。

「どうした、ユリイカ？」

「なんでもないわ、ＲＺＤ。

なんか、あんた、イタルに似ているような気がしただけ」

「やつは、かつて俺のライバルだった。むろん、現実の世界での話だ。

知っているとおもうが、イタルは、ｖｖｗのヴォーカルだった。ちなみに、叫羅蜜斗がベースで、普蕭がドラマー。基本３人だったが、〆裂がギターで参加したことがある。マコトヤは、その友人だった。つまりかつての５神、現在の４神は、みんな、つながっているのさ」

・・考えてみると、ふしめふしめで、その全員に会っている。これってグーゼン？　いいえ、いまおもえば運命だったとおもう。

ＲＺＤが言葉をつづける、

「十七のとき、ライブハウスの出場権をめぐって、コンクールで競った。俺のバンド、ＲＺＤが勝った。だが、俺は、じぶんの負けをはっきり感じていた。

やつは、過激すぎた。だから、受け容れられなかった。反社会的すぎて、とうてい、ステージでやっていいパフォーマンスじゃなかった。

逆にいえば、俺たちのパフォーマンスは、社会に迎合していたのさ。受け容れられるような生半可なロックだったのさ。俺は、出場権をえたが、けっきょく、ライブハウスで演奏しなかった。

そして、やつは、また路上パフォーマーにもどった。つかのまだったが・・・

やつは、ワクの外ですら、まだ過激すぎた。公園の噴水にガソリンをまいて火をつけ、炎上のまえで演奏したりとか、な。警察沙汰で追いつめられ、路上でのゲリラ・ライブですら困難になった。

だが、やつは、いっこう気にしなかった。

常識をいともかんたんに飛び越え、究極のパフォーマンスを演じやがった。

眞神山（まがみやま）での焼身だ。やつは、究極のアヴァンギャルドをやりやがったんだ。だれも追いつけない。1人の観客さえいないステージだ。まったくの犬死（いぬじに）だ。横変死（おうへんし）だ。だれも超えられない。

なんの意味もない。意味なんざ、ぶっ飛ばしちまった。生存を焼き尽くして脱却し、かるがると飛びやがった。天へ翔けちまったんだ。俺は、永遠の敗北でしかない。

生存しつづけってことは、そういうことでしか成り立たない」

あたしには、わかった。けど、あたし、いった、

「ふーん。

勉強にはなるケド、参考にはならナイわ。人は、いろいろだから。んで、あたし、学長のいいタィいみゎわかるよ。

だから、リアル・ウイルスをやっつけなくっちゃいけないってコトだよ。

このウイルスを隔離か、駆除する方法を見つけなくっちゃ。

どうするー？」

イースが瞑黙し、

「なんだか、きみのいうことも、よくわからないな、ユリイカ。

まあ、どうでもいいや。

技術的にどうするか、それにしかきょうみはない」

「あたしだって、そうよ。

わかったって、しょうがないもん」

そうつぶやきながらも、あたし、考えた。

つまりは、さういふコト。イースのいうトおり。
むずかしいコトじゃない。
くだらねっつーか、このばぁーい、最もカンケーないモノが『りあ〜』だとおもう。あたし、ケータイのディスプレイをタップした。
Super;Hyp - iz27
シぶっ（笑）‼
さぁてとぉ。アクセス履歴からさがす。あった、あった。そー、たとえば、これ、こぉゅーやつだ。
どー考えても、こんなもンで、どうにかなるはずがない。
あたし、ケータイのデータをコピペして聖櫃の蓋、ＲＶのトコに貼る。って、現実じゃありえないけど、ここ、ＩＥなら、ふしぎじゃない。
するってぇーと……
「あれ？」
「えー？」
「まじー」
「うそぉー」
どうしてもくっつかなかったお手製『Ｖ』は吸いよせられるように、ぴったりとくっつき……Ｗになったーっ‼
ＲＷ（リアル・ワールド REAL WORLD）の完成だ。
浮彫文字は金の炎でかがやいた。
あたし、マコトヤの言葉をおもいだす。「最もカンケイないものがハマるのだ」
たしかに、嵌まったよ。そういう意味だったんかいっ⁉
あたし、ＡＮＫＡをふり返った。
「できちゃった」
「でも、どうして、ユリイカ」
「うーん。あたしも、ちょっと、ききたいくらいかなー」
イースがうなっていう、
「でも、１つだけわかったことがあるね。

つまり、これが、ユリイカ、きみがねらわれた理由じゃないか」

へ？

そっか。もしかしたら、あたし、ぐうぜん、これを持っていたから、バリユースにねらわれつづけたのかもしれない。

「そうだよ。

リアル・ウイルスにおかされていたＩＥがウイルスを無効化するキーワードを持っているきみを削除すべく、バリユースを起動したと考えれば、ふしぎではない」

でも、だれが大聖堂にウイルスをしかけられるの？　しかも、叡智の究極のような難解なしかけをつくれる人間ってだれよ？

じっさい、ラグナレクか、マコトヤ・アマヤスぐらいのレベルじゃなくっちゃムリだ。

『ｋＯＯ』を理解⁇するひつよーがあるンだけど、ｋＯＯへの解釈なんてもンがあるはずない。

あたしたちは、ただふつーに平常（ヘイジョー）するしかない。

特段のことわない。

そういうと、おもわせぶりないイーかたにナる。

トクダンのこたぁーない、とかゆーと、特段のコトにナっちゃうっしょ？　だよね？　だってさー。

平常（ヘイジョー）にしよーぜとかいって努力しちゃうと、トクダンのドリョクになっちゃうから。

でも、特段も平常（ヘイジョー）のうち。だから、ややこしい。よけいむずかしい。努力も平常（ヘイジョー）のうちになっちゃう・・・

うわぁ、ややこしい。

つまり、これを解（と）く方法はない。たとえ解いても、満足はえられないし、真理を達成した感覚もえられないだろうし、ましてや理解なんてできやしない。

でなきゃー、このあたしが青龍のはずナイジャン。そーユーコトなんだよ。

だったら、だれでも青龍なんだケド、じつにそのとおりで『それ

が青龍の比類なき卓越性』ナンです。ワラワラ。

よーは、ぜったい、とけかれることのないナゾだったのだ。そんなナゾを生み出せるのはパーリ・クラスだ。いや・・・

あたしたちの考えかたが根底からちがっていたのかもしれない。ちがうとさえいえないほど、根底から・・・。たとえば、ＩＥ自身がこのナゾをつくったとしたら？

「これで、ＩＥは、もとの理想の世界にもどるのかな」

エリコがそういった。

イクシュヴァーンが笑う、

「いや、そうではない。ＩＥは、いま、しずかに陶酔（とうすい）している。エクスタシスだ。深い深い陶酔（とうすい）だ。果てしなくひろい。

あたかも、鳥がはじめて空を、わずかでも飛んだときのような、超越の快感に酔っている。

崇高な感激に満たされて。

かろらかで、さわやかで、きよらかな光につつまれて」

そして、ラグナレクのような笑みとともに、うすくひろがった。

香りのよう、空気のよう、音いろのようになって、消えた・・・・・

そう。

ヤッパ、そういうことだったんだー。

あたし、嘆息し、

「よーするに、このウイルス事件って、ＩＥが自己を超越するためのはたらきだったのね」

イースが、

「自己超越・・・・宇宙のすべてが持っている性質だと、イクシュヴァーンはいっていた・・・・」

「そうよ。

宇宙のすべてが持つから、ＩＥのプログラムも持つのよ。

ウイルスをしかけたのは、ユーザーじゃなくっちゃならない、プログラムがそんな恣意的なことをするはずがない、ってかってに決めつけていたあたしたちの考えかたは、かんぜんにおもいこみだっ

たのよ」

「犯人は、ＩＥだったというのか。しかし、人に組み立てられたプログラムがそんなかってなことをするものなのか。それとも作者の意図だったのか、ユリイカ」

「今回のばあい、作者ではないみたいね。

マコトヤがいってたわ。作者もウイルスにこまっているって。

そう、犯人は、ＩＥよ。

ＩＥが自己超越して進化するためウイルスをつくった、というか、自己の一部を改造した……

だから、あたしを消さなくっちゃいけなかったんだけど、でも、消してしまってもいけなかった。

矛盾、……自己矛盾よね。でも、その葛藤が自己超越のために、脱（エクス）自（タシス）のためにひつようだったのよ。

ＩＥはおもいをとげたんだわ。

まだ終わってないけどね。

シルヴィエがあるかぎり、きっとつぎの試練があるんだわ。きっとね（笑）。

でも、それでいいみたいね。

葛藤がなくちゃ、生命ってゆーもんは終わっちゃうんだろーから。

シルヴィエって、悪辣（あくらつ）だけど、大事なんだね（笑）」

あーあ。

ちょーつまんねー。

つーかさー……

光の満潮があたしを呑みこんで成層圏のはてまで飛翔し解き放たれてその広大な海はやがてしずかな湖水のように澄みきって深くかろやかになって信じらんないくらい自由自在でからだがうすくひろがるから森羅万象（しんらばんしょう）になって数百億光年の宇宙を超えて涯のない真の無際限になって眷族をひきつれた青龍が黄金の靄をまとうお辞儀しながら香を焚いてサンスクリット文字の聖句で誦された声明に変じてあたしを荘厳し、あたりまえで、ふつーのつまんねーありふれ

たニチジョーそれが青龍 *ἔκστασις*（エクスタシス）

あたしより強い者も、エライ人もいない。

30　ゲームは終わった Game is over‥‥

「んじゃ、いこっか？」

あたし、そういった。

大聖堂を出た。

広場に降りる。

ふり返ると、階段の上にイタルが見えた。

いままであかるい場所で見たことがなかったから、気がつかなかったけど、彼の顔の左はんぶん、というか、額の上から鎖骨の上あたりまで、1匹の青龍が和彫りの刺青で彫られていた。

額の上、はえぎわから、緋いろの髪を分けるように尾がはじまり、左眼をまたいで、頬骨にうしろ脚があばれ、左あごの下あたりにまえ脚が爪をとがらせ、長い龍首が喉の左を走り、鎖骨の上で、炎のような口をひらく。牙をむき、眼はかっと睜（みひら）かれ、見る人を恫喝（どうかつ）する。

鱗（うろこ）の1つ1つが細密に、精（くわ）しく、くっきりと、あざやかに彫られ、玉虫の鞘翅（さやはね）のように、虹のような青で、なまなましくかがやいている。

けれど、イタルの現象は Air みたいで、なかば透けていた。だから、歩きはじめると、だんだん見えなくなっていく。離れれば離れるほど見えなくなる。

かんぜんに見えなくなるまえに、彼が少し微笑んだような気がした。たぶん、気のせいだとおもう。じぶんが青龍だから、そんな気になったにすぎない。

イタル。ふしぎな存在だけど、〆裂とかマコトヤとか、4神たちのあの哲学というか、思想の源（みなもと）が、青春時代に体験した彼の死という衝撃的な事実に端を発していたんじゃないかみたいにおもえてい

る。そんなふうに、かってに空想してみる。ＲＺＤを見ていると、そう感じる。妄想かナ？（笑）死は人を考えさせる。

黄昏（たそがれ）に影が長くのびる時刻だった。

光のあたる部分は茜いろをおびた黄金いろで、にぶくまばゆく、陰翳の部分がまったりと濃く深い。

憂鬱な悪夢みたい。

ＡＮＫＡがケータイで事務局に連絡し、学長が消えたがどうなったかわからない、と報告した。すると、事務局職員がたんたんという、

「ええ、イクシュヴァーン学長は、消去済みです。失礼ですが、あなたは」

「消去ッ!?　わたしは、ＡＮＫＡです」

「ユリイカさんをお願いできますか」

「ええ、どうぞ」

あたし、出た。

「青龍のユリイカさんですね。じつは、もう、話がだいぶすすんでおりまして・・・・」

「はぁ？」

「次期学長候補が９人いるのです。あなたも、その１人です」

「あたしが？

つーか、学長って、環境的人物限定じゃなかったの？」

「いいえ。べつに決まりはありません。

拒否されますか？　そういうかたもいますよ」

「拒否？　へー、いるんだ。あぁ、でも、だいたい、だれだかわかるなー。

どうせ、タカフシ先生とか、マコトヤ、〆裂・・そのへんの人たちでしょう。どう考えても、ひき受けそうにないよね、あの人たち。

で、結果は、いつわかるの？」

「承諾されるのですね。

結果は、明日の午後にでも」

「わかったよ。よろしくー」
切る。ＡＮＫＡたちがけげんな顔であたしを見てる。なんの話かわからなかったろーな。
「あたし、ここにのこるわ」
「えー？」
なぜか、あたしに決まる感じがしていた。
別れはつらかったけど、義務があるような気もする。
ちなみに、叡智の奥義を極めたあたしは、**QDQ1479** になっていた。

ＡＮＫＡやエリコ、イース、ミーシャも正義の戦いの偉大な功績によってクドク・ポイントが大きく上がっている。

Anka　QDQ：129
Erico　QDQ：115
Iearth　QDQ：128
Measya　QDQ：104

あたしたち女の子５人全員が国王になる資格を持ったことになる。これであたしがいなくても、クラウドは国王不在にならない・・・・
翌日、あたしは、アカデミアの学長に就任した。非錬斗には、助手としていてもらうことにする。
とうぜん、新規登録ユーザー相手に大聖堂で基礎講座を開催し、講義をしなきゃならなかった。
それは就任したつぎの日からあった。
けど、あたしは、あせらなかった。べつに、立派な講義をするひつよーもない。つたえるべきことがつたわればいい。
それは、きょくたんにいえば、一言でもいいのだ。
演壇に上がって、いきなり「喝っ！」と裂帛（れっぱく）の声を発するとか（できナイけど（笑））。
あたしだって、修業時代は、ただただ茶わんを見てろ、っていわれただけだもーん。
いまにして、意味がわかる、つーか、なんだったのかわかる気が

する。
ただ、ＡＮＫＡたちがさっそくあたしの講義を聴講に来たときは、ちょっとアセったけど。てれたなー。
そんなあたしでも、いちおー、アカデミアの学長さまであり、青龍の位を持つ者であり、このＩＥの世界では、かなり大きな権限を持っている。
「それをつかえば、不可能ではないわ」
ＡＮＫＡがそういった。あたしも、そうおもう。
あたしたちは、監視委員会や管理局を通じて、公式に履歴（ログ）を渉猟（しょうりょう）して、ＩＥの作者とも連絡をとりながら、専門家を紹介してもらい、リアル・ウイルス事件（笑）のめんみつでしょうさいな全面的調査をおこなった。
っていっても、あたしは、なんもしてなイんだけドぉ（笑）。
数日にわたる調査のすえ、ＡＮＫＡは、コーヒー片手の午後、結果をあたしたちにこう報告した、
「正常になったＩＥの機能をつかって、作者や管理局の協力の下、かんぺきなスキャニングをおこなったけど、けっきょく、ウイルスが外部から侵入したと考えられるような痕跡は、まったく見つからなかったわ」
剣をかかえてきいていたイースが、
「じゃ、やっぱり、ＩＥがじぶん自身に革命を起こしたんだね。ぼくらの苦労は、いったい、なんだったんだ、っていいたくなるね」
ＡＮＫＡが微笑とともに、ため息し、
「しかたないのよ。
わたしもいろいろ考えたけど、そもそも、ＩＥのすべての歴史は、そこにむかっていたんだわ。
シルヴィエのような国ができたのも、そのせいよ」
「どーゆーことなのー？」
ミーシャがそういって眉を上げた。

「歴史の話になるけど、いい？
神聖帝国のさいしょのころの話よ。
シルヴィエ聖教の教祖で、イヰという聖者がいたことは知っているわよね？
彼が信徒たちに教えたことは、
『自己への執著を捨て、
人を愛するとき、
その魂はきよらかで、
最大の肯定にたっする』
だったの。ふしぎにおもわない？
現実主義の権化のような帝国も、その出発はＩＥの理想そのものだったのよ。それなのに、どうして、物理的な現実主義、科学主義、功利主義的な国になってしまったのか。いや、そういうことは、歴史上、よく見られることだわ。ひんぱんにね。
でも、考えてみて。
ＩＥは、意図的にシルヴィエをつくったんだわ。
意図的に、じぶんの殻から、脱却しようと、こころざしていたのよ。いいえ、いまも、そうなのよ。まさしく『自己への執著を捨て』ってことなのよ。そういう意味では、じぶんのあるべき理想のすがたを、まっとうしたんだわ。
シルヴィエが最もＩＥに異逆的な存在であること、つねにＩＥのアンチテーゼであること、冷厳で、人の哀しみも苦しみもまったく意に介さず、なんの憐憫もなく、人間には理解しがたい、血も涙もない非情な障碍として、壁のようにそびえる存在であることには、意味があるのよ。
旧型『美しく道徳的な理想の世界』への固執をかなぐり捨てて、『力だけの現実世界』を受け入れ、自己を超えた、新しい地平線にたっする。これが今回の事件の背景ね。
聖典盗難事件はその一部だわ。ＩＥがアカデミアの騎士たちや特別高等警察をうごかし、シルヴィエにわたしたちの位置情報をリー

クしていたのよ。

でも、よく考えると、ＩＥのためだけじゃない。

非情なリアル・ウイルスのまえでは、だれもが自己を捨てなければ、勝てないところへ追いこまれるから。

それが自己革命を誘発し、自己超越への叡智（えいち）の道を啓（ひら）く。ＩＥのためだけでなく、わたしたちのためでもあったのね。

だって、じぶんがどんなに苦しんでいても、同情も示さない強敵に対したときは、じぶんの苦しみを棄て去って立ちむかうしかないでしょう」

エリコがいぶかしげに、

「でも、なっとくできないわ。

だってさー、シルヴィエの代々の皇帝だって、アバターでしょう？

帝国の人たちだってアバターだし、つまり、わたしたちと同じユーザーなのよ。ゲームしてる人間なのよ。

いくらなんでも、プログラムにあやつられちゃうものかしら」

イースがしずかに、

「されない、とはいい切れない」

ＡＮＫＡもうなずく、

「それについては考えてみたけど、やはりＩＥはデータをちょくせつ脳に送信するから、一定の影響力があったと考えるほうが正しいとおもう。

たぶん、それは神からの啓示のように感受されたんじゃないかしら。天啓のようにね。

きっと、皇帝ジニイ・ムイのこころにも強い確信をともなって泛かんだのよ。

たとえば、『我こそが聖典を所有するにふさわしい。我こそが聖典の真の所有者である』とか、ね。

で、じっさい、聖典がシルヴィエの皇帝もとに、現象するようになると、驚愕とともに、ムイの狂信はさらにエスカレートして、『聖

典を、聖典があるべき正しい場所へ、神が転移させてくれた。我が手に神がはこび、我にそれを託す。

おお、現実だったのだ。まさしく我こそは、神のみとめた全世界の支配者なのだ』的な感じかしらね（笑）。

それでもって、

『聖典の略奪者であるユリイカという少女がいると、神のお告げが夢にあらわれた。

聖典を奪い返すことが皇帝の聖の聖なる義務である』って、感じになったのかしらねー。

そして、ログを閲覧し、ジンと手を組み……まあ、ぜんぶ想像だけど」

「うん、いわれると、あたしもそんな気もしてきた」

「ＩＥは、帝国をつかい走らせるだけでなく、それ以外にも、さまざまな者をつかってユリイカを妨害しけど、究極的にはユリイカにウイルス駆除をしてもらうことを希求していた。

……自己超越のためにね。

もしかしたら、犯人は、環境的人物かも、って考えがあたまをよぎったことはあったけど（ユリイカとラグナレクのところへいくとちゅう、ユイゴート山のまえで話をしてたときとかね）、基本的に、わたしたちは、まさかプログラムがそんなことを意図するなんて考えてもいなかったわ。

でも、いまはもう、そうとしか考えられない」

「てゆーか、そうかもしれないンだけど」

あたし、昨日今日考えていた考えをまとめながら、たどたどしく、

「でもね、あたしたちの感覚が根底からまちがってるかもしンないのよ。

うまくいえないんだけど、ＩＥのほうが人間より上だった、つーか……ＩＥがＩＥを人間につくらせたってゆーか……

つくられるってことが、じつは、つくるってことだった、つーか、なんていったらいいの？

あたしたち、つくることがしかけることで、つくられることがされることって考えているけど、じつは逆かも、みたいな・・・

もっといっちゃえば、ＩＥが、じつは作者を存在させていた、みたいな・・・

それ以上に、ＩＥが人間を生じさせた・・・、つまり、ＩＥをつくらせるために、数千万年まえに人類の祖先を生じさせ、数十億年まえに地球を生じさせ、数百億年まえにビッグバンを生じさせた、っていうか・・・

なんていうか、ふつーは原因が結果を生むっていうけど、ほんとうは、結果が原因をつむいでる、みたいな・・・

つくるってことが従属で、つくられるほうが主体的っていうか、受身と能動・使役との関係の解釈がじつは逆だったっていうか・・・

原因が結果で結果がじつは原因でした、みたいな、うーん・・・

時間の解釈がほんとうは逆で、過去が結果で未来が原因だった、みたいな・・・

なんかさー。言葉がなくて、いいあらわせないんだけど」

みんな、あぜん。あんぐりして、なにもいわない。

「ユリイカ、なに、いってんのー？」

やっと、ミーシャがそういった。あたしは、

「だってさー、もし、あたしがあれをケータイで見てなかったら、どうなってたわけ？

あたしは、ぐうぜん、それを持っていて、ぐうぜん、ＩＥのユーザーになっていて、ぐうぜん、ＩＥにそれを発見されて、ねらわれて、・・・なのかしら？

できすぎじゃない？」

イースがうなった、

「ぅうーん。まあ、その点にかぎっては、そういわれてみれば、まあ、たしかにそうかもしれないが・・・」

ＡＮＫＡは、だまっていた。エリコは、

「ぜんぜん、わかんないよ。

つーか、ンなコト、わかってどうなるの？

人間がいるからＩＥがつくられた、ってのが、ＩＥが人間につくられたから、人間がＩＥをつくった、だから、人間がこの世界にいる、ってのもありかもって、あんた、いうんでしょ？

そんなの同じことじゃん。

わたしたち、砂糖があまいからあまい、って感じるとおもっているけど、その解釈が逆だったからって、なんなのよ？　舌があまいと感じるから、砂糖があまいんだとしたって、たいして変わんないじゃん。

どっちにしろ、わたしたちは、過去をどうすることもできないのよ。

だから、結果が原因を発生させるんだとしたって、それを知っても、考えても、なんの意味ないじゃん？

どうにもできないんだからさー」

「わからないわ。

どっちでもナイのかもしンないし。

筆記試験や問題集じゃないんだから、こたえなんてどこにもないのよ。

ってゆーか、それですらない、いいえ、そーゆーふうですらないのかもしンない（笑）

問いつめても、意味はないし、そもそも、いみってなんなの、みたいな……って感じなんだけど……。

だってさー」

「だって、なによ。わかりにくー」

「ショギョーわ、ムジョーなのよー♡」

怒ったような、けげんな顔で眉を上げたけど、けっきょく、エリコは、笑うことに決めたらしい。ぷっ、って笑ったぁ。

あはは。

彼女たちがクラウドに帰る日。

あたしは、学長の儀礼服を着て、城門のまえまで、みんなを見送

る。
新しいクラウドの王ＡＮＫＡを見送るには正装がふさわしい。
「ユリイカ、きみならできるよ」
って、イース。
「元気でねー、ぅえーん‼」
泣くなよ、ミーシャ・・・・
「またすぐ会うよ。
決まってるさ」
なら、洟(はな)すするな、エリコ。らしくねー。
ジャジュや迦楼羅、エチカやユユと握手した。「がんばってね」
非錄斗も彼らと、かたく手をにぎりあう。彼は、あたしの秘書官として、このアカデミアにのこるからだ。
「さ、ゲームは、これで、いったん、終了よ」
ＡＮＫＡが最後にそういった。
そういって、ケータイを出し、ログオフにする。
イースも、エリコも、ミーシャもケータイを出した。
あたしも、ログオフにする。
消えていく記憶のように、すがたが消えていく。
入るときは、城門から入ったのに、出るときはこんなンなんだ。
バイバイ・・・
もぉ、じぶんの部屋にいた。
時計を見ると、ゲームしていた時間は、１秒間ですらない。ふしぎだとおもう？
ケド、現実だって、０秒間の体験じゃなくね？
ＡＮＫＡやイースやエリコやミーシャと、ずぅっといっしょにいたけど、じっさいぃ、べつべつの時間にゲームしてたのかも知ンナイしー（笑）。

†　epilogue　†

朝だぁーっ。

✤卍あたし卍✤ーっ!!

起きて登校したヨぉ!?

昨夜は寝る時刻がおそくならなかったから、眠くもナイし。

とーっても。爽快だぁーっ。

「おはヨー、ユリイカ」

「ぉは㊐☆」

友だちとのあいさつ。教室入れば、すべてぐゎ、いツもどーり。

アハハハ　あはは　あは（叭羅蜜斗かょ）

コウキくんに逢ったぉー。

「おはよう、コウキく～ん♡♥♡!!」

ちょっと胸、うずいてなくね？　クスクス、そぉーそぉーそれがニチジョー。ヘイジョーぅ。

んで、学校終ワっテ、家帰った（笑）。

ＡＮＫＡからメール♡♥来たーーっ!?

『やっぱさー、

ぁレ、わt=Uにー、

ぉクってくんナィかナ～

キネンにさー、

モッテぉきたぃンダょネ～』

しゃーないなー。

あたしが聖櫃に貼りつけた、ムイミな大神咒真実不虚超絶究極真最奥奥義を送ってやったわー。そくせっしゅわっ（即説咒日）!!

つーか、これ、

.+:｡o○o｡ ∈・♡♥ミ ß"゜.+:｡o○o｡ ∈・♡♥ミ ß"゜.+:｡o○o｡。

(*艸$)!
ぁ t=Uのぷロフ t=ﾞ おー(∀)!

ト も t=ﾞ ﾁわ （ヽ艸・○)*:.。☆...
ゅ L1 汰ン ぃUのン りゃ t=あン(ω)
こンぐら L1 力な(◆、∀°)ﾉ*.

どω②絡ωでくでるト嬉UL1 でつ(*●艸∀<$)◆◇

L1ッぱ L1t=ぃ勹ツU乙ル力ら(° 艸 °)
Σ(Pqョ Д∫o○*)*° /⌒★〃

乙力 絡み矯正だヨ *藁(*凹Qωo 艸*)◆

柿仔ヨロ d･3°)◆。ｲ

ス t=あ-ﾄﾝ($∀)a

.+:｡o○o｡ ∈・♡♥ミ ß"゜.+:｡o○o｡ ∈・♡♥ミ ß"゜.+:｡o○o｡。